〔査読論文〕

仙台藩校・養賢堂障壁画の朱子学による考察
―東東洋筆「河図図」「洛書図」を中心に―

八島　伸

はじめに

天明・寛政年間（一七八一～一八〇一）の日本は、全国的な諸藩の藩政改革の時期であった。江戸においては、寛政異学の禁により、昌平坂学問所の学問が朱子学に統一され、政治の主体である武士の学問と教育の思想として中心的な役割を果たした。その影響は仙台藩にも及んだ。文化・文政年間（一八〇四～一八二九）の仙台藩は、大飢饉と相次ぐ藩主の早逝により藩体制が揺らぎ、その上ロシアによる侵攻の脅威が意識され始めた時期であった。そして仙台藩校・養賢堂は文化八年（一八一一）に始まる学制改革により、朱子学を中心に据えつつ算術・蘭学・医学といった実学を備えた総合学園のような様相を呈した。学制改革では、寛政から続く朱子学の文脈を受け継ぎ、諸問題の解決を担う人材の育成が目指されたのである。

改革の一環として、教育の中心施設である講堂が建造され、その一室の視学所には十六点の障壁画が制作された。作品の大半が、仙台藩御用絵師・東東洋（一七五五～一八三九）の作であり、一部が弟子・伊藤東駿（?～一八三九）の手による。現在は「河図図」一幅、「洛書図」二幅のみが現存している。養賢堂の建物は昭和二十年（一九四五）に戦災で全焼したものの、改革を主導した学頭・大槻平泉（一七七三～一八五〇）の著書『講堂小誌』により、講堂の構造や各障壁画の図様、大まかな意義が判明している。「河図図」と「洛書図」は、障壁画群の意味や役割、講堂の設計思想を明らかにするうえで重要な作品であるため、今日まで残されている点は意義深い。

本障壁画群の近世絵画史上の価値は、仙台四大家の一人と称される作者・東東洋に依存しており、濱田直嗣氏の論考に取り上げられて以降、作品に対する個別的な研究は久しく為されなかった。近年、寺澤慎吾氏によって「河図図」を中心とした論考が執筆され仙台という地方における画家・東洋の画業を紹介された点で注目に値する。[1] 作品の依頼者・大槻平泉は、寛政年間の昌平坂学問所において学び、古賀精里（一七五〇～一八一七）ら「寛政の三博士」からも高く評価された人物であり、自身が培った学問観によって学制改革を成し遂げた。その平泉の意向が反映された講堂障壁画は、実は仙台に留まらない意義を有している。よって本稿では、藩校に絵画が求められた歴史的背景や、文化・文政年間における政治・教育史・思想史の究明を視野に入れつつ、「河図図」「洛書図」を中心とした障壁画全体の意義について、

朱子学の文脈を踏まえて分析する。そして、その製作背景と歴史的意義について考察する。

一　作品概要と講堂建築

1　作品概要と作者・東東洋

◇河図図　東東洋筆　仙台市博物館
一五七・〇×六九・〇センチメートル　紙本淡彩　一幅

◇洛書図　東東洋筆　山元町教育委員会
各一七〇・〇×七九・〇センチメートル　紙本淡彩　二幅

「河図図」と「洛書図」は、先行研究にも言及されるように、仙台藩校・養賢堂の講堂の一室に描かれた障壁画群の一部であったと考えられている。講堂は前述した十九世紀初めの学制改革に伴い建築された教育の中心施設として、文化十四年（一八一七）年十二月に落成した。改革を主導した養賢堂学頭・大槻平泉が講堂建設の構想や顛末について著した『講堂小誌』には、講堂内の一室・視学所の構造、「河図図」「洛書図」を含む障壁画の略図と配置、画題としての意義、東東洋と伊藤東駿の作であることなどの記述がある。掲載された略図との類似が、本図を養賢堂の障壁画とする主要な根拠となっている。講堂は明治維新にあたり養賢堂が廃止された後も宮城県の庁舎として用いられ、大正十一年（一九二二）三月には史跡に指定されたが、昭和二十年（一九四五）七月の戦災により全焼した。障壁画の多くは散逸、あるいは講堂と共に焼失したとされる。現存するのは仙台市立博物館所蔵の「河図図」一幅と、山元町教育委員会所蔵の「洛書図」二幅、つまり本稿で中心的に扱う作品のみである。しかしながら、「河図図」「洛書図」が軸装となった時期や経緯は不明である。「洛書図」は現在山元町歴史民俗資料館の所蔵となっている。資料館の所蔵となる以前、現在の山元町坂元周辺を領有した伊達家家臣大條家の所有であった。旧坂元村長を務めた十八代当主・伊達宗康（一八七〇～一九五二）により坂元小学校に寄付され、現在に至る。[2] 宗康の父である十七代当主・道徳（一八三八～一九二四）以降、大條家は伊達姓を名乗った。道徳は仙台藩最後の藩主・伊達慶邦に仕え、奉行職として戊辰戦争の戦後処理にあたった。そして明治五年（一八七二）の本姓復帰命に従い伊達宗亮を名乗ったのである。美術講究会の幹事を務めるほか、「伊達翠雨」として自らも南画の作品を多く残すなど、道徳は文人としても活躍した。明治十七年（一八八四）の内国勧業絵画共進会では「南宗ノ古画に倣い敢えて師伝ヲ受ケズ。」と称され、円山応挙、呉春、渡辺崋山、東東洋などの模写を残している。「洛書図」が大條家の所有となった時期は不明であるが、明治維新による養賢堂の廃止に際し、藩の要職にあり書画にも通じていた道徳の所有となった可能性が高い。

改めて両図の概要を記す。「河図図」は、縦一五七・〇×横六九・〇センチメートルで、軸装、紙本淡彩であり、仙台市指定の文化財である。画面下部には、背に複数の旋毛を持つ馬が向かって左を向いて立つ様子を描く（**図1**）。旋毛のほかには鼻脇に生えた髭や両前脚の付け根にみる炎形の羽根が特徴である。加えて、偶蹄類の特徴を持つため、「河図図」の馬は通常の馬とは異なる。体の輪郭線に中墨、毛描きは中墨に加え代赭の線を用いて表現する。瞳の周囲と両前脚の付

図２－１　東東洋「洛書図」
山元町教育委員会蔵

図２－２　同左

図１　東東洋「河図図」
仙台市博物館蔵

け根の部位には金泥を用いる。馬の背後から画面中央部にかけて波打つ河川を描くが、非常に淡く表現するため、劣化により消えかかっている。画面上部には白と黒の丸と直線で構成した河図を表す図象を描く。なお、画面上部から中央部にかけて金泥を施す。画面右下に「法眼東洋」との款記があり、「筆叟道人」（白文方印）、「百歳居士」（白文方印）と押印するため、仙台出身の四条派の絵師で、仙台藩御用絵師であった東東洋の作とわかる。本作品は画面下部から中央部にかけて本紙の状態が悪く、馬の鼻先や脚部、尾の付け根など、本紙を補って修復し補彩した部分が存在する。

次いで「洛書図」は、二幅ありそれぞれ各一七〇・〇×七九・〇センチメートルで、軸装、紙本淡彩である。「河図図」とは異なり、落款は認められない。まず**図２―１**について述べる。画面下部から中央部にかけて、甲羅に紋様を持つ亀が岩場に立つ様子と、うねる波を描く。亀は耳や甲羅から伸びる長い苔を持つ。画面上部には「河図図」と同様に図象を描くが形状は異なり、洛書をあらわす。画面中央左側には襖の引手の痕跡があり、軸装に加工した際に残ったとみられる。続いて細部を観察する。頭や背甲や右前脚、後脚には柔らかく太い輪郭線を淡墨で描く。頭部について見ると、黒目と目の輪郭線には濃墨を用い、白目には僅かに金泥を施す。耳、鱗、眉、顎などの陰影表現には中淡墨のほか、「河図図」でもみられた代謝の線を用いる。右前脚、左脚は頭部よりも全体的に階調が濃く、鱗の陰影と爪を焦茶色で表現する。背甲について、各甲板の模様は中心部を淡墨で塗り、その周縁に地を残すように、淡墨と代謝の細い線を交互に描く。肋甲板と椎甲板はさらに中心部に焦茶色で模様を塗り重ねる。甲板の洛書の図象は点ではなく放物線で描き、金泥を用いる。背甲の後部から生える苔は

金泥を用い、細く早い筆で描く。腹甲は濃墨で描く。亀が立つ岩場は、太く濃い輪郭線を用いるほかは、グラデーションと点苔により立体感を表出する。波は画面上部と下部にみられ、線の太細やグラデーションで表現される。もう一幅の**図2―2**の岩場や波についても同様の表現がみられ、画面中央右側には引手の痕跡がみられる。岩場と波の表現について、**図2―1**は画面上部に剥離、画面下部に変色した部分がある。**図2―2**も画面下部に傷みがみられる。「洛書図」は「河図図」に比べ状態は良く、本紙が補われた箇所は少ない。しかし、補筆が施された箇所は「河図図」よりも多い。**図2―1**の画面下部の岩にみる濃墨の点苔は、空中に浮くように打たれており、これと同様の階調・形状の点苔は後補と判断できる。**図2―1**の画面中央部の点苔及び岩の輪郭線、**図2―2**の岩に施された点苔も同様である。また**図2―1**の中央部、亀の背後に霞のように塗られた箇所も、濃墨の点苔が上から重ねて塗られている。**図2―2**の中央部の霞も補筆とみえ、引き手跡の部分の色や状態は、補筆が施されていない上部の波と同一であることから、作品が襖絵であった時期に補筆されたと判断できる。

以上、「河図図」と「洛書図」の概要について述べた。両図は共に太く緩やかな中淡墨で輪郭線を用い、形態感を柔らかく表現する東洋の画風が現れた作品である。グラデーションによる陰影表現も、墨使いに優れた四条派の画家としての特徴である。しかし、両作品は後補を考慮しつつ、当初の表現を想定する必要がある。

ここで画題となった河図洛書について簡潔に述べておきたい。「河図図」「洛書図」の図像的な特徴は、龍馬・神亀という祥瑞に伴い、白と黒の点と線によって構成された図象が描かれる点である。各図象は陰陽五行説に基づいており、白点は奇数、黒点は偶数を表現している。河図とは、旋毛を持つ龍馬と、一から十の点と線による図象・十数図の双方を指す呼称である。洛書も同様に、紋様を背負う神亀と一から九の点と線による図象・九数図を指す。河図洛書は『易経』繫辞上伝を典拠に持つ易の根本思想である。河図は八卦、洛書は九疇の起源として、儒教において聖人が政治を行うための手段と認識された。朱子学において九数図・十数図と結びつき、定説となった。朱子学は学制改革以降に、養賢堂において教育された学問であるため、藩校に河図洛書が絵画として描かれた背景と関係する。朱子学における河図洛書の意義については、次章以降で詳述していく。

作者の東東洋は[3]、名を洋、字は大洋といい、俊太郎、儀蔵と称した。東洋、玉峩、白鹿園などの号がある。金成（宮城県栗原市）の生まれで、明和五年（一七六八）、十四歳で仙台に移住し、滞在中であった深川水場町狩野梅笑（師信・玉元・一七二八～一八〇七）に画を学んだ。安永二年（一七七三）に十九歳で上京して池大雅（一七二三～七六）に師事し、『芥子園画伝』の講釈を受けたという。また、大雅の孫弟子・林閬苑（生没年不詳）から「青墨」の使い方を教わる。さらに円山応挙（一七三三～九五）、呉春（松村月渓・一七五二～一八一一）と交流し画法を学んだ。

天明四年（一七八四）には長崎へ足を伸ばし、滞在中は来舶清人の画家・方西園（一七三四～八九）に師事し、当代一流と称された。同八年から翌九年にかけては大阪に滞在し、木村蒹葭堂（一七三六～一八〇二）と頻繁に交流を持った。文人のほか、江戸の画家・春木南湖（一七五九～一八三九）らの画家とも交わった。江戸に戻ると、大坂の漢学者・片山北海（一七二三～九〇）の使いとして頼春水（一七四六

～一八一六）を訪ねた。春水は、寛政改革において朱子学正学化を老中・松平定信（一七五九～一八二九）に掛け合った人物の一人とされる。[4]

法眼となった東洋は、寛政七年（一七九五）に呉春の仲介で門跡寺院・妙法院を訪れた。当時の門主は百十九代光格天皇（一七七一～一八四〇）の兄にあたる妙法院宮真仁法親王（一七六八～一八〇五）であり、応挙や呉春ら円山四条派の画家や文人を厚遇した。東洋は法親王が薨じた二ヶ月後の文化二年（一八〇五）十月、法親王の肖像画を手掛け妙法院に奉じている（**図3**）。妙法院に残された肖像画は同三年に製作された呉春筆と、前述した東洋筆のみである。東洋は、御簾越しではなく真仁法親王と顔を合わせ、肖像画を描けるほどの間柄であったとわかる。また、同十三年には岸派、円山派、四条派、鶴沢派といった京都を代表する絵師たちと共に中宮御所造立に際する御絵御用を仰せ付けられた。[5] 妙法院との交流が途絶えた後も、東洋は皇族から評価された。

寛政八年（一七九六）正月には、仙台藩八代藩主・伊達斉村（一七七四～九六）に画業で仕えた。文化元年（一八〇四）に雷火によって焼失した仙台城二の丸の「松の間」の襖絵を、同六年（一八〇九）に手掛けた。その後、同年一月十一日には単身、同四年八月から九月にかけては長男の東寅（一七九三～一八五三）と共に、江戸藩邸において九代藩主・伊達周宗（一七九六～一八一二）に席画を披露した。また、同十四年には門人の伊藤東駿と共に養賢堂の障壁画と、「大舜命契図」一幅を描いた。京都の中京を拠点として活動した東洋は、晩年にあたる文政八年（一八二五）に仙台に戻り画業に務めた。翌年には「養老のため終身五人口」、天保三年（一八三二）以降は毎年「金五圓」を賜り、仙台藩に厚く遇された。同十年十一月二十三日に八十五歳で亡くなり、曹洞宗寺院・昌伝庵（宮城県仙台市若林区荒町）に葬られた。

2　学頭・大槻平泉と講堂障壁画

図3　東東洋「真仁法親王像」妙法院蔵

まず、仙台藩校・養賢堂の概要について略述する。[6] 仙台藩における学問所は、元文元年（一七三六）、仙台藩五代藩主・伊達吉村（一六八〇～一七五二）の時代に開設された。宝暦五年（一七五五）には東北地方が冷害に襲われ、農村復興と藩体制の立て直しが図られ、人材の育成が急務となる。七代藩主・伊達重村（一七四二～一七九六）は学問所の改革に着手し、学問所を移転させ、医学の推奨、寺子屋の建設を実施した。明和八年（一七七一）年には賢人の養成を期待して親書した「養賢堂」の額を下賜し、翌安永元年から学問所を養賢堂と称した。八代藩主・伊達斉村（一七七五～一七九六）の世には天明三年（一七八三）と同七年の大飢饉が藩体制を揺るがした。九代藩主・伊達周宗に至り、文化六年（一八〇九）に学頭となった大槻平泉によって講堂の建設を含む学制改革が主導されたのである。同年には、周宗が疱瘡を患ったため、同年から周宗の弟にあたる徳三郎（宗純、

一七九六～一八一九）が代理として儀式に出席していた。文化九年（一八一二）に周宗が危篤状態になると、徳三郎は将軍へのお目見得をせずに斉宗と改名し、十代藩主となった。学制改革及び障壁画の制作時期における藩主は斉宗であった。

大槻平泉は、学頭として、仙台藩校・養賢堂の教育を振興した儒学者である。平泉の略歴については先行研究で指摘されるように、「儒家家業伝統由来書上」（文政三年、一八二〇）や平泉著『経世大要』（文化三年、一八〇六）、平泉著とみられる大槻家の家譜『家譜書出』（文政八年、一八二五）に確認できる。[7]

名は清準、字は子縄、通称を民治という。磐井郡中里町（岩手県一関市）に生まれた。大槻家は磐井郡において大肝煎を務めており、親族には蘭学者・大槻玄沢（一七五七～一八二七）、儒学者・大槻磐渓（一八〇一～一八七八）、国語学者・大槻文彦（一八四七～一九二八）などがいる。平泉の兄は、昌平坂学問所において学び、儒学者・松崎慊堂（一七七一～一八四四）や養賢堂の教育を担った儒学者・志村五城（一七四六～一八三二）と交わった。平泉は学問的土壌が備わった環境に育ったのである。八歳から十七歳まで地元の神職・篠谷修理に句読を学び、寛政二年（一七九〇）から志村五城の弟で博覧強記の儒学者として著名な志村東嶼（一七五二～一八〇二）に師事した。翌年、東嶼が幕府に召され、学問所で講釈手伝に任じられたことを機に、平泉も共に江戸へ上って昌平坂学問所に入学した。学問所における十数年間は、寛政四年（一七九二）より大学頭となった林述斎（一七六八～一八四一）や、「寛政の三博士」ら、特に古賀精里に朱子学を学び、学問所の書記や市司計、司監を務め、書生寮の舎長に任命された。寄宿生として学生への素読指南や入門者への日講にも従事した傍ら、林述斎の命により中国の度量衡についての書籍『諸代尺度考』を編纂するなど、学問所で出版される書籍の校合・編纂に携わっている。また、聖堂の新寮建設では「絵図面仕立方」を務めた。以上のように平泉は、修学に励み、実務運営や書籍編纂、学寮建設など、学制改革や講堂設計の糧となる経験を積んだ。加えて、大学頭や寛政の三博士らとの繋がりによって学問所における地位を築いたことも、仙台藩において平泉が優位に立ち回った要因である。

学問所に学ぶ間、平泉は二度諸国遊歴の旅に出ている。一度目は享和元年（一八〇一）で、学問修行を目的とした。六十日の暇を許可され、京都、大坂周辺及び紀州へ向かっている。二度目は、享和三年（一八〇三）正月から文化二年（一八〇五）九月までの二年半の遊歴であった。平泉は京都、大阪から九州と四国に訪れている。遊歴中には各地の学者と交流して見聞を広め、長崎に立ち寄った際には中国人やオランダ人との面会や、オランダ天文学を学ぶ機会を得ている。遊歴には林述斎や若年寄・堀田正敦（一七五八～一八三二）の助力があった。

文化三年（一八〇六）三月には、仙台藩に儒員として召し抱えられた。同六年十月、田辺楽斎（一七五四～一八二三）に代わって藩校・養賢堂の学頭職に就く。仙台藩九代藩主・周宗に学制改革構想の作成を命じられ、林述斎や堀田正敦に意見を求めつつ、文化七年（一八一〇）に「学制改革意見書十八ヶ条」として提出した。意見書に記された運営方法や理念について、儒学者・桜田欽斎（一七七四～一八三九）を中心に批判されたものの、平泉は改革を推し進め、その後四十年近く施設の整備拡充と学制改革に尽力した。嘉永三年（一八五〇）一月十七日、七十八歳で亡くなった。

『仙台叢書』十八巻所収の「養賢堂学制改意見書」には、文化七年（一八一〇）に平泉がまとめた改革案と、昌平坂学問所の大学頭・林述斎の意見が記される。[8] 平泉の改革案は、養賢堂の財政基盤を確立し、仙台藩に頼らず独自に教育事業の実施を可能にした上で、学問の普及と実用的な能力を持つ人材の育成を目的としていた。文化八年より、改革案に基づいた事業が展開され、独自採算の実現により財政基盤が確立された。同年には、学派を朱子学に統一した後、書学・算術・礼法の三学科を新設している。中でも、算術の学科を藩校で教える例は当時では珍しかったという。同九年には、兵学・槍術・剣術の三学科が設置された。加えて養賢堂における教科書類の出版が計画され、仙台国分町の書肆・西村治右衛門により「養賢堂蔵板」と称される出版物が発行されたという。[9] 文政四、五年（一八二一、二）頃には、養賢堂に蘭学方が新設され、オランダ書物の翻訳事業と教育を実施した。

学制改革は、施設の拡充にも及び、文化九年、同十一年（一八一四）に藩校の敷地を広げ、同十四年には独立の施設として医学校を百騎丁（東二番丁）に建設している。障壁画が描かれた講堂は同十三年一月に建築が始まり、翌年に落成した。その他、蘭学・ロシア学の「和解方」の部屋を含む学寮や、手習稽古所、剣槍術所、蔵版摺所、文庫など諸施設が建設され、文政六年（一八二三）三月に落成した孔子廟を最後に養賢堂の拡充工事は終了した。

講堂は養賢堂における中心的な学舎であり、学制改革の一環として文化十四年（一八一七）に落成した。その構造や障壁画の意義については、『講堂小誌』により判明する。[10] 『講堂小誌』は、講堂にまつわる書物をまとめた文献史料である。古賀精里が平泉に送った序文を除けば、各書物の著者は大槻平泉であり、制作時期は講堂落成以降となる。同書所収の資料を列挙しておく。「仙台修学記」は講堂落成までの経緯を記し、「講堂制度」は講堂の設計思想と理論を述べる。次いで視学所の構造や障壁画の意義について述べた「邦君視学所画記」（文政元年、一八一八）を所収する。「大舜命契図」の制作経緯について述べる。「大舜命契画幅記」（文政二年十二月）では、視学所に掛けられた「講堂本末」は、講堂落成に際して行われた祭儀や、講堂についての詩や頌などを記す。掉尾を飾るのは、平泉の昌平坂学問所における師・古賀精里からの贈られた「精里先生贈序」である。そのほか、「講堂全局図」などの平面図や、「視学所画縮図」といった障壁画の略図も所収する。なお、『講堂小誌』を収録した『養賢堂学制』には、謡曲「立教」「視学」「泮林」という平泉自作の三曲が収録される。

『講堂小誌』所収の「講堂全局図」（**図4**）によると、講堂には計二十五室あり、間取りは正方形の形をしている。部屋毎には格があり、用途が決められていた。中央の一室「学」は学頭の講釈の場であり、「消息の卦」と呼ばれる十二種類の卦が、透かし彫りで欄間に装飾された。[11] 「学」の四正に位置する部屋は「校」である。障壁画が描かれる北校は藩主の視学所、東校は素読の見分所、南校は藩主の諸芸御覧所、西校は礼・書・算の見分所として用いられた。「庠」の十六部屋は素読教場、算術・礼方の教場、各役職の詰所であり、「序」の四室は事務職員・給仕の部屋であったという。また、講堂の中庭には梅、松、梧、竹を庭木として植えていた。

「視学所全図」（**図5**）によれば、視学所は南北を三:二の比率によって襖で仕切り、北部を障子の戸によって三つに分け、中央を「正室」、左右の二部屋を「掖室」と呼んだ。「正室」の北面を床の間として金を塗布し、南部を「堂」と呼んだ。障壁画は計十六点あり、「正室」

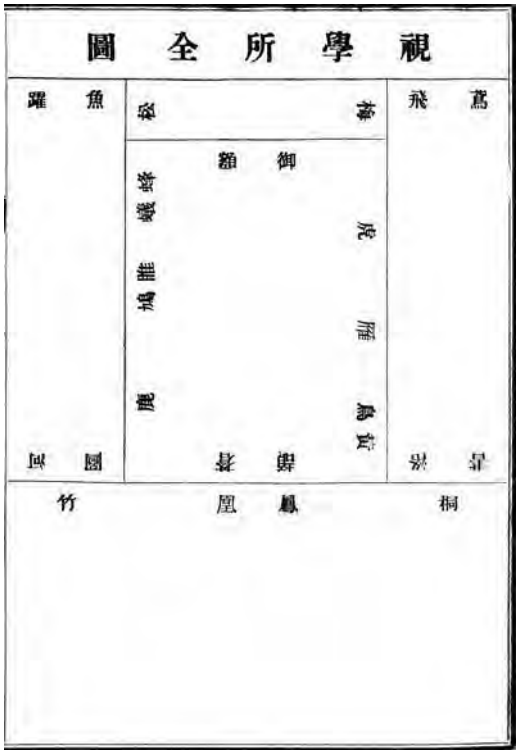

図5　「視学所全図」『養賢堂学制』

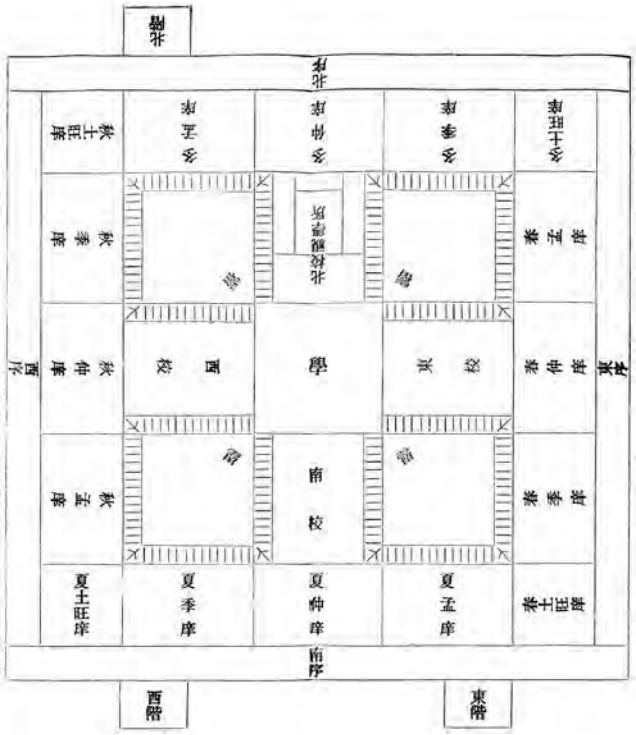

図4　「講堂全局図」『養賢堂学制』

と「掖室」を仕切る障子の欄間、襖、床の間の東西の壁それぞれに描いた。また、床の間の「御額」は、仙台藩七代藩主・伊達重村（徹山公）筆の「養賢堂」の額を指す。

「正室」について、床の間西側の壁に「松図」、東側に「梅図」をあらわし、障子の欄間には「虎図」二面「雁図」一面、「黄鳥図」一面、「蜂蟻図」一面、「雎鳩（みさご）図」一面、「鹿図」二面を描いた。南側の襖には北面するように「蒼頡図」四面を描いている。「掖室」北側の南面襖には「魚躍図」、「鳶飛図」を一面ずつ描き、南側北面の襖に「河図図」二面、「洛書図」二面をあらわした。「正室」南側の襖は、堂に面して「竹図」・「鳳凰図」・「桐図」を二面ずつ描いている。絵画の制作は主に東東洋が担当したが、「魚躍図」「鳶飛図」のみ東洋の弟子・伊藤東駿の手による。養賢堂の建物は昭和二十年（一九四五）に全焼したが、「視学所画縮図」により各障壁画の図様を確認できる。加えて、昭和初期の調査により実測図とスケッチが作成されており、部分的ではあるものの視学所及び中央の学室の様子が判明している（**図6―1**）（**図6―2**）。なお、障壁画の略図、視学所内部の再現図については、**図7―1**と**図7―2**を参照されたい。

二　朱子学と藩校教育

1　朱子学の基本思想

本作品の画題である河図洛書は、朱子学において重視される思想である。朱子学は、寛政二年（一七九〇）の異学の禁により、江戸幕府直轄の学問所・昌平坂学問所（昌平黌、湯島聖堂）を中心に、藩校教育において正統とされた。養賢堂の学制改革では、寛政異学の禁に倣

図６－１　視学所のスケッチ

図６－２　学室のスケッチ

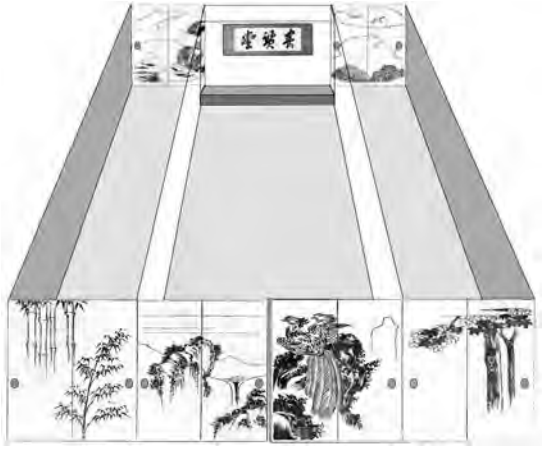

図７－１　「視学所再現図・南面」

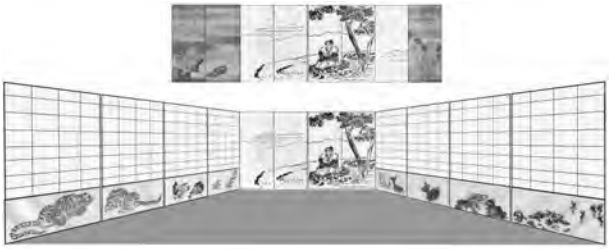

図７－２　「視学所再現図・北面」

い学派が朱子学に統一された。本作品は、教育の場に描かれた絵画であるため、日本における朱子学の動向も制作背景及び意図に関係する。本節では、寛政期以降の朱子学の教育思想について述べる。[12]

朱子学は儒学（儒教）の一学派である。儒学は孔子に始まる政治哲学であり、経世済民を目的とする。つまり政治によって、道徳の社会的な実現を目指す学問である。中国北宋では、宋学と呼ばれる新たな儒家哲学が形成され、朱熹（一一三〇～一二〇〇）に至って大成された。以降その学説は朱子学と呼ばれ、中国における学術史・思想史において重要な地位を占めると共に、近世日本の藩校教育にも影響を及ぼした。

朱熹の思想は理気論に基づくため、理気哲学と呼ばれる。理気論では、世界に存在する物質やエネルギーの根源を気と、世界の法則・道理を理として捉える。理は自然と人間を貫く普遍的秩序であるため、自然界の秩序法則（物理）と人間世界の道徳的秩序（道理）は同一とされた。そして人とは、理に調和する本性を備えて生まれる存在なのである。[13]「性は善なり、故に皆な堯舜たるべし。」（『朱子語類』）とあるように朱子学の人間観の根底には、『孟子』の性善説と、人は誰しも学問・修養によって聖人になれるという聖人可学論が存在する。「性」とは人が天から賦与された理（天理）と解釈される。この考え方が朱子学の主要命題の一つ、「性即理」である。そして人の本来の性「本然の性」が孟子で説かれる仁義礼智に信を加えた五常である。学問・修養は、五常を完全に体現し、聖人となるための方法であった。

朱子学が学問の入門書として重視する『大学』（『礼記』大学篇）には、政治の手段としての学問観が記される。『大学』八条目「格物・致知・誠意・正心・修身・斉家・治国・平天下」は、天下を治めるた

めには、自己修養から始めなくてはならないという理想的な政治実践の段階を指す。「格物・致知・誠意・正心・修身」は学問による人間形成である。次いで「斉家・治国・平天下」とあるように、為政者は自身の人格を完成させた後、民衆を教え導かなくてはならない。朱子学の政治に対する立場は徳治主義であり、学問・教育・政治が一体であった。また、朱熹が大学篇の論理を再構成した『大学章句』では、「三代の隆なるや、その法（教化の制度）浸く備はれり。然して後、王都国都より、以て閭巷に及ぶまで、学あらざる莫し。」として、夏・殷・周の三代の教育制度を理想とした、万人への教育普及の重要性を述べる。以上から、朱子学においては、学校による組織教育が原則的に理想とされたのである。[14]

朱子学の代表的な学問・修養法の一つ、格物窮理について述べる。格物という語は『大学』（『礼記』大学篇）の八条目のうち「格物致知」に基づき、窮理は『易』説卦伝を典拠とする語である。朱子学では、両語は共に事物の道理を究めるという意味を持つため、格物窮理と呼ばれる。『大学章句』格物補伝では、次のように説明される。

> 是を以て大学の始めの教えは、必ず学者をして凡そ天下の物に即きて、其の已に知れるの理に因りて益ます之を究めて、以て其の極に至るを求めざるを莫からしむ。力を用うるの久しき、一旦豁然として貫通するに至ては、則ち衆物の表裏精粗、至らざる無く、而して吾が心の全体大用も明らかならざる無し。此を物格ると謂い、此を知の至りと謂うなり。
>
> （朱熹『大学章句』格物補伝）

格物窮理では、事物に偏在する一つ一つの理を究めることにより、世界全体の理を認識した「貫通」と呼ばれる状態を目指す。また事物の理は、大まかで表面的に理解しうる「表・粗」と、緻密で心の深くにおいて内面的に了解される「裏・精」に二分される。つまり理を得るには段階的な修養が必要となる。格物窮理の主眼は、あくまで聖人の境地への到達、内的・主観的了解にある。しかし朱熹は必要不可欠な過程として、事物の知的究明と外的認識を位置付けた。全体の理に至るには、博学多識による知識の集積が不可欠とされたのである。[15]この知的認識に基づいて、自然学や象数に基づく陰陽法則の研究、考証学、勧農文にみられる農業技術の調査など周到な調査分析が進められた。近世においては文献学、博物学、自然誌、律暦学、考証学、医学、数学、本草学、また産業技術など様々な分野において格物窮理が思想的背景となった。[16]これらの知的実証学、自然科学は格物窮理説の外的・客観的認識の展開上に位置する。つまり、朱子学は自然科学に親和性を持ち、その発展に能動的な役割を果たしたのである。

2　寛政改革における朱子学

十八世紀後半の日本において、特に天明・寛政年間（一七八一～一八〇一）には、教育的諸事象の高揚がみられた。全国的には諸藩の藩政改革の時期であり、藩校の設立など、学問と教育に関する政策的取り組みが為された。その一例である寛政異学の禁により、朱子学は昌平坂学問所において正統とされ、政治の主体である武士の学問と教育の思想として中心的な役割を果たした。寛政異学の禁は寛政二年（一七九〇）、寛政三博士の一人である儒学者・柴野栗山（一七三六～一八〇七）の松平定信への働きかけによって挙行されたが、広島藩の

儒者・頼春水（一七四六～一八一六）、後に昌平坂学問所の儒者となる佐賀藩の古賀精里（一七三六～一八〇七）、大坂在住であった尾藤二洲（一七四七～一八一三）、備中鴨方の儒者・西山拙斎（一七三五～一七九八）、備後神辺の儒者・菅茶山（一七四八～一八二七）などの朱子学者が多大な影響を与えたとされる。[17] また、これらの朱子学者の多くが西国出身であり、明和・安永年間に京都・大坂において学んでいる。特に頼春水、古賀精里、尾藤二洲は、仁斎学、徂徠学、折衷学派など朱子学批判を出発点とした儒学から転向して朱子学者となり、中心的に正学派朱子学の思想を形成した。[18]

寛政異学の禁の意義は、学問による社会秩序の統合にあった。君主や藩主を中心とした国家的な統合の理念として、朱子学のイデオロギーが再認識されたのである。朱子学の理は、宋学の定着期において、理を否定する徂徠学によって崩壊させられた。しかし、宝暦から天明年間（一七五一～一七八八）の農村や都市、流通市場に至る在来的秩序の解体の危機に対応して、藩政秩序の再編のために、社会全体を覆う統合的原理が再び求められた。そして、武士から民衆に至るまでの社会の秩序化を可能とする学派として、倫理道徳を重視する朱子学が正学とされた。朱子学正学論について、松平定信は『花月草紙』において「藤樹・蕃山・伊物の徒出でたれども、おほやけの学の道はかはる事なし。もしひとの心のまにまに、をのがさまざま論説を経文に加へなば、代々の大君の御説よりして、諸侯・士大夫をはじめ、おもひよることいたらば、何をもて後の世を救ひなん。」と述べている。[19] 世を救うための学問、つまり政治の根本理念として朱子学が想定されており、「おほやけの学」（官学）を統一する必要性を述べたのである。

実践的な民衆教化の手段としては、教育が明確に意識された。特に武士教育は、政治主体の育成のため、就学の義務化に近いほどに振興された。松平定信は、寛政五年の昌平坂学問所の改革にあたり制定された「学規」において、学校は人材育成の場であると共に、教化の淵源であると述べている。つまり、幕政に積極的に参加し、学統による統合理念に即して、現場での行政百般を的確に処理できる人材の育成を学校教育に求めた。この方針は、蘭学・医学・兵学・数学・天文地理学といった実学摂取の理論への発展性を内包していた。寛政以降、諸藩の藩校が朱子学を中心として多彩な学科を設置した事実との関係が窺え、養賢堂もその一例と考えられる。

三　画題・河図洛書

1　北宋以前の河図洛書

本作品の画題・河図洛書は儒学の経典である四書五経のうち、『易経』と最も関係が深い思想である。本節では、『易経』について概説したあと、朱子学が生まれる以前の河図洛書の発展の過程と意味について、先行研究に基づいて論述する。[20]

『易経』は、古代中国に生まれた占筮である易から発展した儒家経典である。易では、八卦（☰（乾）、☱（兌）、☲（離）、☳（震）、☴（巽）、☵（坎）、☶（艮）、☷（坤））と呼ばれる八種の符号によって自然や人間、方位や物の性質を表す。陰陽、柔剛、女男などの二元論的な性質を八卦に付与し、吉凶を占う。そして『易経』とは、八卦同士を上下に組み合わせ、万物の変化を象徴する六十四卦と、その意義や性質を述べた卦爻辞をまとめた書物である。『易経』は本来占筮についての経典であったが、戦国時代末から秦漢時代末にかけて儒家に

より道徳的・倫理的解釈が加えられ、七種十篇から成る『易経』の解釈書・十翼が成立する。漢代には、卦画と卦爻辞に十翼を加えた十二篇が『易経』とされた。以降『易経』に関する学問・易学は解釈論として発展した。十翼の一種・繫辞伝において言及された河図洛書も、同様に変化と発展を遂げる。河図洛書は、易の基本概念である八卦をもたらした伝説として後世に受容された。

河図洛書のうち、始めに文献に現れるのは河図である。その出典は極めて古く、儒家経典『尚書』顧命篇、『礼記』礼運篇、『論語』子罕篇、『易経』繫辞上伝にまで遡る。これらの経典の成立年代は歴史的に前後すると思われるが、河図洛書が持っていた本来の意味を読み取ることができる。先秦時代に成立した『論語』子罕篇では「子曰く、鳳鳥至らず、河図を出さず、吾已んぬるかな。」、『礼記』礼運篇では、「故に天膏露を降らし、地醴泉を出だし、山器車を出し、河馬図を出し、鳳凰麒麟、皆郊椒に在り。」とある。河図は鳳鳥や麒麟、醴泉などと並列して記述されるため、河図は初め祥瑞的な性格を持つ伝説として誕生したとわかる。祥瑞とは、天が聖人の優れた徳や治政に応えて出現させた特異的・超常的な動植物や自然現象である。転じて聖人が現れる前兆とも定義される。そして、『易経』の解釈書のうちの一篇・繫辞上下伝に記述され、河図に洛書が追加された。

是の故に、天神物を生じ、聖人之に則る。天地変化し、聖人是に効ふ。天、象を垂れ吉凶を見し、聖人之に象る。河、図を出だし、洛、書を出だし、聖人之に則る。易に四象有るは、示す所以なり。辞を繫くるは、告ぐる所以なり。之を定むるに吉凶を以てするは、断ずる所以なり。

（『易経』繫辞上伝）

繫辞上伝では、対句表現によって河図と洛書が明確に対比される。直後に続く「聖人之に則る」という記述は、単なる祥瑞であった河図洛書に聖人法象の対象となる規範的性格を与えた。また、繫辞下伝に説かれる古代中国の伝説上の帝王・伏犠の画卦作易伝説と結び付けられ、河図洛書は八卦の根源として位置付けられた。つまり、十翼による儒教的解釈が河図洛書にも影響を及ぼしたのである。

次に、漢代の河図洛書について述べる。

河図、八卦。伏犠氏、天下に王たるに、龍馬河に出で、遂に則ち其文を以つて八卦を画く。

（孔安国注『尚書』顧命篇）

天禹に与へ、洛書を出だす。禹治水にいたる時、神亀文を負ひて、列背に数有るを列ね九に至る。禹遂に因りて第（ただ）之を以つて九類と成る。

（孔安国注『尚書』洪範篇）

劉歆以爲らく虙羲氏（伏犠氏）天を継ぎて王たり、河図を受け、則りて之を画く。八卦是なり。禹、洪水を治め、洛書を賜り、法りて之を陳ぬ、洪範是なり。

（班固（三二～九十二）『漢書』五行志）

繫辞上下伝では河図洛書を区別しなかったが、漢代には河図と洛書の発生は別とされた。前漢の孔安国（前一五六～前七四）の『尚書（書経）』注は偽撰ともされるが、伏犠が龍馬のもたらした紋様（河図）を基に八卦を、伏犠と同じく伝説上の王である大禹が神亀の背の数

（洛書）を基に洪範九疇を作成したという解釈を成立させた。劉歆（前四六～二三）も同様の説を提示し、八卦は『易経』の根源であり、洛書を根源とする洪範九疇は、『尚書』の一篇であると同時に儒教における政治の原則であるとした。つまり、重要な儒家経典の内容と結びつき、河図洛書は道徳規範的性格と権威を強めたのである。また、龍馬と神亀という図像的イメージが形成された点は、本作品を考える際に重要となる。孔安国注と劉歆の説は、唐代に至るまで主流であったという。[21]

ところで、本図にみられる河図洛書が白黒点図の図象として文献上に現れたのは、朱熹の著作『易学啓蒙』が最初であるが、河図と洛書を表す図象の十数図・九数図は、漢代には河図洛書とは独立して成立していた。易学には、『易経』を卦爻が象徴する形や数理によって理解する「象数易」と、象数に頼らず、倫理道徳のみを説く卦爻辞等の文章を重視した「義理易」という二つの立場が存在する。九数図・十数図は、「象数易」によって生み出された。「象数易」は前漢中期の孟喜（前七〇～前五〇頃）に始まり、後漢の鄭玄（一二七～二〇〇）らによって隆盛を極めた。漢代の「象数易」は陰陽五行説を取り入れ、日月の進退、四季の推移などの天地自然の理法を爻によって具象化した。換言すれば「象数易」は、世界の在り方を提示する、抽象論に留まらない合理性を備えた学問である。

ここで象数論によって成立した九数図・十数図の概要について述べる。まず十数図は、『易経』繫辞上伝の天地の数に陰陽五行や方位を配当した図を指し、『易経』繫辞上伝の記述を根拠とし、後漢の鄭玄の解釈を基礎とする。

天一、地二、天三、地四、天五、地六、天七、地八、天九、地十。天数五、地数五。五位相得て合有つ。天数二十有五、地数三十。凡て天地の数、五十有五なり。此れ変化を成し鬼神行らす所以なり。

（『易経』繫辞上伝）

鄭玄は天地の数に基づき、奇数を陽、偶数を陰とし、一から五を生数、六から十を成数と称した。天の積算は二五、地の積算は三十、天地の総数は五十五である。そして一・六、二・七、三・八、四・九、五・十の配合を説いた。天地の十数を陰陽匹偶とし、五行の数と方位に結合させると、十数図となる。その際、奇数は○、偶数は●として表す。[22]

天一水を生じて北を于し、地二火を生じて南を于し、天三木を生じ東を于し、地四金を生じて西を于し、天五土を生じて中を于す。陽耦ふなく、陰配ふなく、未だ相成るを得ず。地六水を成して北を于し、天一と并す。天七火を成して南を于し、地二と并す。地八木成して東を于し、天三と并す。天九金を成して西を于し、地四と并す。地十土を成して中を于し、天五と并す。

（鄭玄注『周易（易経）』）

九数図は、『大戴礼記』にみる「明堂九室の制」を典拠とする。明堂とは、天子が政治や教育を行う際に使用される宮殿であったという。[23]

明堂なる者は、諸侯の尊卑を明らかにする所以なり。（中略）二九四七五三六一八なり。（中略）九室十二堂あり。

（戴徳（生没年不明、前漢）『大戴礼記』）

文中の「二九四七五三六一八」の数の羅列は、中央を五とすると、縦横斜めの計が全て十五になる三×三の魔法陣を形成する。この九数図は、五行や八卦に関連して説明が可能であるが、特殊な配列は『易経』とは無関係であるため、十数図とは成立過程が異なる象数論といえる。

2 『易学啓蒙』と河図洛書

漢代以降、魏の王弼（二二六～二四九）により老荘思想を取り入れた「義理易」が支配的となり、河図洛書は軽視された。さらに、唐初に奉勅撰された『五経正義』が国学として享受され、科挙では唯一絶対の経義として扱われたため、唐代には易学や河図洛書に関する新たな展開は示されなかった。宋代に至って河図洛書が再解釈される契機となったのは、宋学の形成である。宋学では、漢代の「象数易」と陰陽五行思想を基盤として新たな易学が展開されたため、『易経』を典拠に持つ河図洛書は、太極図、先天図と共に発展した。とりわけ河図洛書は、朱熹により宋代以前とは大きく異なる意味を付与され、『易学啓蒙』において初めて十数図、九数図としてあらわされた。『易学啓蒙』は朱熹の「象数易」を展開させた著作であり、河図洛書、先天易、占筮について述べている。本節では、『易学啓蒙』における河図洛書の解釈について順を追って述べ、本作品の画題としての意義を考察する。また、第二章に述べた朱子学の思想と河図洛書の関係についても言及する。

河図と洛書の関係について、『易学啓蒙』は以下のように解釈する。[24]

其の実は天地の理は一のみ。古今の先後の不同有りと雖も、其の理は則ち二有ることを容れざるなり。故に伏犠は但だ河図に拠りて以て易を作るに、則ち必ずしも洛書を預見せずして、已に逆えて之と合す。大禹は但だ洛書に拠りて以て範（洪範）を作るに、則ち亦た必ずしも河図を追求せずして、已に暗に之を符す。其の然る所以の者は何ぞや。誠に此の理の外に復た他の理無きが故を以てなり。

（朱熹『易学啓蒙』蔡元定注）

朱熹の理の思想に則れば、河図と洛書にはそれぞれ異なる理が存在するはずであるが、実は根本となる理が一つであるため、河図と洛書は互いに符号するという。つまり、全く別の時代に出現した河図と洛書、それらを起源として制作された『易経』と『尚書（書経）』洪範篇は本質的に同一であり、表裏の関係にあるというのである。河図洛書を『易経』と洪範篇の起源とする思想は、孔安国や劉歆といった漢代の儒学者の説に倣っているが、朱熹の思想の特徴は象数を用いて両者の一致を根拠づけた点にある。

『易学啓蒙』では河図に十数図を、洛書に九数図として説明する。本章第一節において論じたように、十数論・九数論は漢代において成立していた。河図洛書伝説と十数・九数の象数論の結合は、宋代に入り、初め易学者の劉牧（生没年不明）によって為された。劉牧は河図に九数を、洛書に十数を配当し、両者を伏羲に一源する説を打ち出したが、従来の説との矛盾が生じていた。この矛盾を是正したのが朱熹と蔡元定（一一三五～一一九八）であった。これについては次のように説明している。

曰く河図に則るは其の中に虚し、洛書に則るは其の実を総ぶるなり。河図の五と十を虚にするは太極なり、奇数二十偶数二十なる者は両儀なり、一二三四を以て六七八九と為るは四象なり、四方の合を析て以て乾坤離坎と為し、四隅の空を補て以て兌震巽艮と為すは八卦なり。（中略）曰く洛書にして其の中を虚にするは則ち亦た太極なり。奇遇各二十居す、則ち亦た両儀なり。（中略）また則ち八卦なり。河図の一六を水と為し、（中略）則固に洪範の五行にして、五十有五は又九疇の子目なり、是則ち洛書固に以て易を為るべくして、河図も亦以て範を為るべし。

（朱熹『易学啓蒙』蔡元定注）

朱熹・蔡元定説によれば、河図、十数図を構成する天地の総数と、洛書を淵源に持つ洪範九疇の細目を合計した数は、共に五十五となる。つまり、洛書から『易経』が、河図から『書経』洪範篇を作成することが可能であると述べる。河図洛書を交易的に論じる根拠に用いられるのが、十数図、九数図といった象数なのである。その他、暦法の起源となる十干十二支や五声十二律、五運六気と易範の符合を例示するなど、徹底して数による原理を究明している。数による論理の一例として、太極から八卦への展開について述べる。陰陽説では、万物が陰陽に分かれる以前の渾然一体の状態を太極と呼称し、そこから陰陽の両儀、太陽・太陰・小陽・小陰の四象、そして八卦へと分化するとされた。朱熹が継承した易図・太極図に詳しいが、十数図と九数図においては、五行における土の数である五と十を、中央に配するのが太極だという。そして両図の中央の土を取り囲む数の合計は共に四十であり、奇遇各々二十に分かれるため陰陽の両儀を象徴する。四象と八卦については、両図の配列に適合するよう論が展開されるが、最終的には五行と方位に結び付けて論じられる。本章第二節において述べた通り、朱熹の理気哲学において陰陽五行は気質と呼ばれる物質の根源である。よって、象数との結合により陰陽五行を象徴するようになった河図洛書は、万物造化の根拠、つまり天理として位置付けられる。河図は五行相生（木火土金水）の順序に従い、東→南→中→西→北となる一方、洛書の運行は、五行相克（水火金木土）の順序に従って北→西→南→東→中となる。河図洛書は一対となって五行の運行、つまり天地間の自然現象の移り変わりの法則を示しているのである。換言すれば、朱子学の理気論による万物造化の淵源、人間が体現すべき万物の理を表した思想が河図洛書といえる。

3　絵画化される河図洛書と日本における受容

本節では、日本における河図洛書について例を挙げて論じる。

河図洛書は、『易学啓蒙』が成立する以前に日本に流入していた。現存する日本最古の和歌集『万葉集』一巻、「藤原宮之役民作歌」には、次のように記されている。

（中略）

吾作　日之御門尓　不知国　依巨勢道従　我国者　常世尓成牟
図負留　神亀毛　新代登　泉乃河尓　持越流　真木乃都麻手乎
百不足　五十日太尓作　泝須良牟　伊蘇波久見者　神随尓有之

右、日本紀曰、朱鳥七年癸巳秋八月、幸藤原宮地。八年甲午春正月、幸藤原宮。冬十二月、庚戌朔乙卯、遷居藤原宮。

（『万葉集』）

「我国者　常世尓成牟　図負留　神亀毛　新代登（我が国は、常世にならむ、図負へる、神亀も、新代と）」の部分は、日本が常世になるという、新しい時代を祝福してめでたい模様のある神亀が現れて、という意味である。つまり、藤原宮の造営にあたり、祥瑞が現れたのである。『日本古典文学全集』では、孔安国注の『尚書』を引用し、洪範九疇の元となった天子受命の河図であると説明している。[25] 河図と洛書を本質的には同一であると解釈しての説明と考えられるが、『万葉集』における「図負留　神亀」は、洛書を指す。『万葉集』は天平宝字三年（七五九）以後の成立であり、この和歌の制作年と考えられる朱鳥七年（六九二）、あるいは翌八年（六九三）は中国では則天武后（六二四～七〇五）の治世にあたる。当時の河図洛書は、河図が八卦、洛書が洪範九疇の起源として、それぞれ龍馬と神亀がもたらしたという孔安国、劉歆説が主流であった時期である。よって『万葉集』に記された洛書は、朱子学が現れる以前の、祥瑞伝説としての側面が強い解釈といえる。

日本において河図が絵画化された例としては、寺澤氏によって既に指摘がある[26]中国明代の類書『三才図会』（万暦三十七年、一六〇九）「鳥獣巻三　獣類」に「龍馬」が掲載される（**図8**）。背に八卦を背負うため、河図を表す。龍の顔や体全体を覆う鱗、四肢の付け根から生える翼が描かれるため、麒麟に近い表現である。また、平住周道（生没年不詳）著・橘守国（一六七九～一七四八）画の中国に関する知識を集めた百科事典『唐土訓蒙図彙』（享保四年、一七一九刊）では、「龍馬」として、白黒の点で表された河図を背負う馬が描かれる（**図9**）。『三才図会』の龍馬とは異なり、河図を背に持つ以外は通常の馬であり、瑞獣の特徴は持たない。そのほか、寺澤氏は「龍馬蒔絵筮器」（東京国立博物館蔵）を挙げる（**図10**）。湯島聖堂の祭儀に用いられた資料の一つで、安永四年（一七七五）三月に、肥前島原藩主・松平忠恕（一七四〇～一七九二）が奉納したとみられる。筮器には波の上を飛ぶ龍馬が描かれ、四肢の付け根から翼が生え、背には旋毛により河図が表されている。洛書については、『唐土訓蒙図彙』に「神亀」が描かれる（**図11**）。亀は背に白黒点図による図象を背負っており、説明文にも「今の洪範なり」とあるため洛書と推察する。しかし、図象、頭部、甲羅、四肢など養賢堂との類似点はみられない。本作品の制作年とも比較的近い作例としては、京都御所（禁裏）の紫宸殿に描かれた賢聖障子の一面、「負文亀図」がある（**図12**）。賢聖障子とは、漢の宣帝（前九一～前四九）が、賢く徳のある功臣十一名を麒麟閣に描かせた故事に基づいた鑑戒画である。[24] 寛政度の造営においては狩野典信（一七三〇～一七九〇）が制作を任されたが、中途で逝去したため、住吉広行（一七五五～一八一一）が跡を引き継いで描いた。現在は、安政度の造営において広行の次男・住吉弘貫（一七九三～一八六三）により修理されたものが残っている。『古今著聞集』には、寛平年間（八八九～八九八）に初めて描かれたとある。寛政度には紫宸殿に中国三代から唐代までの賢聖三十二名が描かれたが、時代によって形式は異なるという。禁裏は近世に入り、永禄度、天正度、慶長度、寛永度、承応度、寛文度、延宝度、宝永度、寛政度、安政度の十回に渡る造営が行われた。負文亀図はこのうち寛政度の造営となった寛政二年（一七九〇）に描かれた。天明八年（一七八八）の大火による焼失をきっかけとして計画されたこの造営では、平安時代における古制を復興が

図10　「龍馬蒔絵筮器」（部分）江戸中期（18世紀後半）
東京国立博物館蔵

図 8　「龍馬」『三才図会』（部分）

図 9　「龍馬」『唐土訓蒙図彙』
（部分）

図12　住吉弘貫「負文亀」（部分・模写）

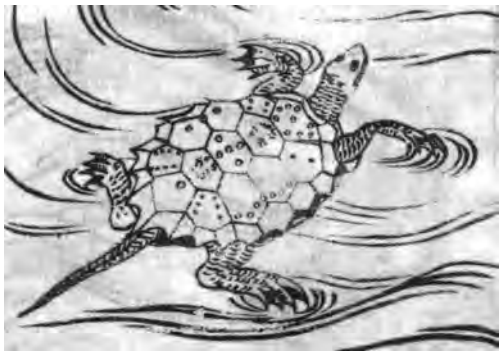

図11　「神亀」『唐土訓蒙図彙』（部分）

図14　原在中「神亀図」（部分）

図13　「緑毛亀」『和漢三才図会』（部分）

目指された。寛政改革を実行した老中・松平定信が惣奉行となり、寛政の三博士の一人である儒学者・柴野栗山（一七三六～一八〇七）を古典の調査にあたらせ、各殿舎の構造から障壁画の画題に至るまで古制を用いたとされる。

紫宸殿の「負文亀図」は、賢聖障子中央の戸間上部に描かれる。画面は横長で、画面中央に岩場と背甲に紋様を持つ亀をあらわす。紋様は『唐土訓蒙図彙』の「神亀」同様、点で表現するが、「負文亀図」の洛書は青点で構成する。養賢堂の「洛書図」は、金泥による紋様で洛書を表現するため、両図とは異なる。亀は横に突き出た耳と苔が伸びた尾を持ち、『和漢三才図会』にみえる「緑毛亀」（**図13**）と似た特徴を示す。目元の表現なども含め、養賢堂の「洛書図」と類似する。岩場に打ち付ける波の表現は、強い輪郭線を用いる点が特徴である。「負文亀図」は、栗山の考証により従来の「蓬莱図」から変更された画題である。「負文亀勘文」には、栗山と公家・五条為徳（一七六三～一八二三）の間に交わされた考証のやり取りが残っており、河図洛書についての解釈がみられる。[28] 河図と洛書とは本質的に異ならないとし、洛書は九戴一履の九数と解釈するため、おおむね朱子学における洛書観と符号する。「負文亀勘文」の内容は、河図洛書の解釈のほか、洛書の図象の配置や、紋様や甲の配色など、図様についても詳述される。当時においても河図洛書は絵画化される例が少なかったとみえ、『淮南子』や『宋書符瑞志』、『公羊伝』、『水経注』など色や図像的なイメージが言及された文献に頼らざるを得ない状況が窺える。「負文亀図」は、朱子学の洛書の図象を背負っているものの、内裏と藩校という描かれた場の性質が異なるため、養賢堂の洛書図とは異なる意義を持つと考えられる。前節で述べたように、特に朱子学の文脈においては、理により一体とされる点に意義があるため、片方のみを描く「負文亀図」は祥瑞伝説を表した絵画とみられる。一方で原在中（一七五〇～一八三七）による「負文亀図」の模本とみえる「神亀図」（**図14**）には、『万葉集』「藤原宮之役民作歌」が賛として記される。よって、藤原宮造営に際して現れた祥瑞・神亀の、寛政度の内裏造営時における出現を切望する意図が、画題選択に影響し、その際の紋様として洛書の図様が採用されたと推察できる。

河図洛書は祥瑞としての性格を持っていたが、『易経』繫辞上伝での言及を契機として多く儒学者に解釈され、朱熹によって儒家経典の根源や、象数論と陰陽五行思想に基づいた世界認識の根拠に発展した。祥瑞としての河図洛書は、聖人が天の理を明らかにし、八卦や洪範を用いて人々を導く聖人法象を意味した。宋代の朱熹に至って、易によって説明される世界観はより現実世界に接近した。そして朱熹は数に規則性を見出し、易の基本概念・河図と洛書を一対として大きな原理法則にまとめ上げたのである。前提には「天地の理は一のみ」という理気哲学、そして格物窮理による徹底的な調査分析の姿勢が存在する。自然界の法則のみならず、道徳的規範をも内包する理によって陰陽五行の気質が生じ、万物が生まれるという世界観に基づいた河図洛書の解釈は、朱子学の権威の高まりと共に定説となった。朱子学は、寛政改革以降、日本において正統とされた。本作品の依頼者・大槻平泉も朱子学者として養賢堂の改革に臨んでいる。自然と人間存在を繫げて捉え、格物窮理説に基づく合理的な実践と他学問を受容する朱子学の性質は、河図洛書に表現された世界観を根拠としていた。それゆえ、河図洛書は、実学を重視する教育事業であった学制改革においても重要な意味を持ったとみることができる。

四　講堂建築と障壁画の意義

1　講堂の構想と河図洛書

『講堂小誌』所収の「講堂制度」、「邦君視学所画記」等から、「河図図」・「洛書図」を含む障壁画並びに講堂建築全体の構想は、著者である大槻平泉が考案したと判明している。寺澤氏は、「仙台修学記」と「講堂制度」の記述に基づいて、講堂の背景思想には古代中国における学制と、河図洛書の象数が存在すると述べた。[29]また講堂の構造について、「平泉は理想的な教育を実践するために、それら（儒学で重視された易と古代中国の学制）の考え方を発展させ、「数」や「卦」といった天から与えられた理論に基づく空間を作り出したのである。」と結ぶ。ただ、筆者は朱子学の文脈においてさらなる解釈が可能と考えるため、本節では講堂の構造をそのように捉え、背景思想について概説してみたい。

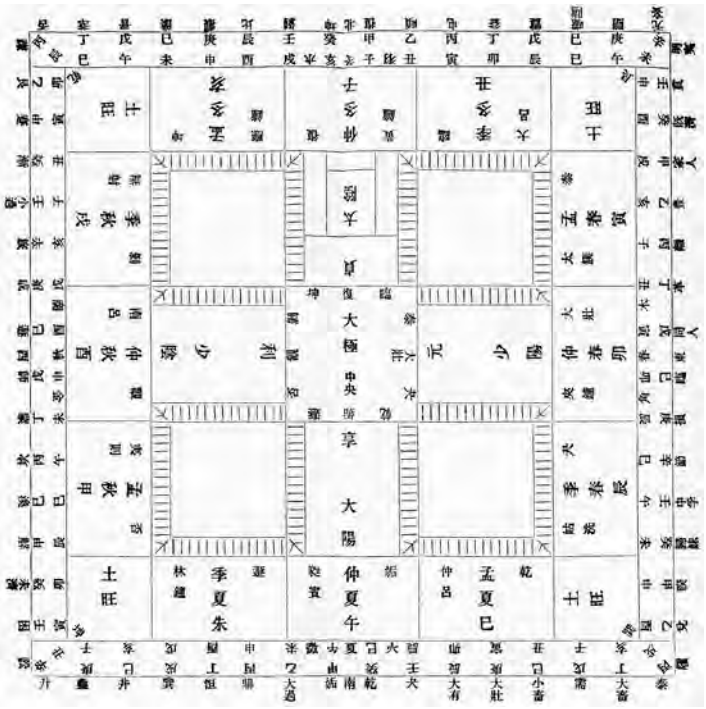

図15　「講堂諸属配当図」『養賢堂学制』

『講堂小誌』「講堂制度」には、講堂建築の論理が説明されている。

夫れ中央は土、土その数は五なり。是以て河洛在て共に中に居る。其の五大衍の則五十と為す。蓍策の数なり。故に学室席五十を容し、大衍の数なり。一二三四は陰陽の位、而して六七八九は陰陽の数なり。是以つて河洛在て共に五の外に環し、陽二十にして陰亦た二十、これを合わせて則ち四十と為す。故に校室四十席。陰陽の位と数の積とに法るなり。（中略）而して三代校庠の制兼存す。而して結搆の度、則ちこれ洛書に本とし、これ明堂を参とす。参伍錯綜し、衍してこれを五とす。これ河図に稽し、これ易象に質し、縦横逆順なり。（大槻平泉「講堂制度」『講堂小誌』）

講堂は大きく二つの要素が根本となって設計された。まずは、古代中国の学制である。文中の「三代校庠の制兼存す」は、前述した部屋毎の名称の理由を説明した記述である。「学」は夏・殷・周の三代、「校」は夏王朝、「庠」は周王朝、「序」は殷王朝というように、古代中国の学校の呼び名に準える。儒学、そして朱子学において夏・殷・周の三代には理想的な政治が行われたとされた。『大学章句』で朱子学が学校教育を重視する根拠も、三代を理想とする立場にあり、それが寛政異学の禁において再認識されたのであった。

次に河図洛書の象数である。各部屋の名称には、前述した古代の学制を用いる一方で、部屋の数、席数等の根拠には象数が用いられた。「夫れ中央は土、土其の数は五なり。是以て河洛在て共に中に居る。」以降の記述は、『易学啓蒙』にみられた河図と洛書を象数によって交易的に論じた文章と同様の意味を持つ。つまり朱子学における河図洛書の一致が、講堂建築に関わるあらゆる数を規定している。明堂は九数図であり、天子が政治・教育を行う場という意味を持つ。よって、藩校の学舎の典拠として適していたのである。また「参伍錯綜し、衍して之を五とす。」とあるように、一から九の数を三×三の正方形の配列で表す洛書を五×五に再構成し、講堂を全二十五室とする根拠とする。部屋数を五×五とする場合、九数図より一周り多く部屋が発生するため、四象、四徳などの陰陽五行の運行をより詳細に表現可能となる。「参伍錯綜」という語は、『易経』繫辞上伝の「参伍を以て変じ、其の数を錯綜す。（参伍以変、錯綜其数）」を典拠に持ち、陰陽の複雑な変化を指す。平泉は、明堂の魔法陣としての特質を保持しつつ、より複雑に陰陽五行を表現することにより、講堂の思想的な基盤を強固にする狙いを持った。

実際に、『講堂小誌』「講堂所属配当図」（**図15**）では、講堂の空間に付与された様々な属性が記される。講堂の中心である「学」を太極として、外側に至るにつれ四象、八卦と分かれ、最終的各方位の柱が六十四卦を表すように分化している。その他、「学」に施された一年の運行を示す消息の卦と元亨利貞の四徳、『易学啓蒙』で河図洛書に結び付けられる形で言及された五行、暦法である十干十二支と五声十二律が配当される。そして四方には四季が孟・仲・季の三つの区分で配され、四隅の部屋には季節の変わり目である土用が表現される。以上のように、八卦と四季のみを表す明堂の制と比較すると、講堂の五×五の構造はより発展的である。講堂は、古代から続く学制と近世における朱子易学の根本思想・河図洛書によって、藩校教育の中心施設として確立している。

平泉は、寛政期の昌平坂学問所において学んだ朱子学者であり、河図洛書の図象が初めて現れた『易学啓蒙』を養賢堂版として校訂し出版した。講堂の構造は、平泉の朱子学者としての思想が反映されたと推察する。平泉の河図洛書観を示す資料として、『河洛精蘊』の序文と目次を挙げる。[30]『河洛精蘊』は河図洛書についての学問書である。序文には、河図洛書の概要と略史が平泉の所感も交えて記され、全六巻の概要も窺い知ることができる。

河図洛書を稽古するに、書と易に於いて著す。史に於いて、則ち漢史具に載す。此天の帝王を錫ふを以て、世の宝を希むなり。蓋し天地数を有す。嘗て形れて河図を為る。其数五十有五、伏犠授るを以てす。天地又数を有す。また形れて洛書を為る。其数四十有五、大禹に錫ふを以てす。是に於て二聖則りて易範作る。易に曰く、河図を出だし、洛書を出だす。聖人これに則る。これこれを謂ふなり。今河洛を統ぶに、斯ちその数を陳ね、共に一百を為る。此天地の数未だ分かれざる者なり。その既に分かれたるや、十数を掲ぐるはその常を示し、九数を肆ぬるはその変を見る。十数は経にして体なり。九数は緯にして用なり。その数異なると雖も、経緯相須め体用相済ふ。一途に出づるが如し。

（大槻平泉『河洛精蘊』序）

河図洛書が伏犠と大禹という二聖人により作られられたとし、九数・十数論に結び付け、体用関係とするのは朱子学の解釈である。以降の序文と目次には、祥瑞や儒家経典と結びついた政治道徳のほか、象数・算法・暦法など河図洛書の象数論による実学的な内容も含まれる。清朝康熙帝（在位一六六一～一七二二）が編纂させた科学宝典『御製律暦淵源』百巻には、河図洛書と数学の関係を説いた数理科学書『律暦淵源』が含まれる。『律暦淵源』では、数理科学の基礎を易学や術数学に求め、河図を加減法、洛書を乗除法の起源として対置し、暦法や律呂と具体的に関連させて説明する。[31] つまり、祥瑞伝説と自然科学が両立しているのである。さらに朱熹の『周易本義』や『易学啓蒙』の易解釈が基本となるため、清代における朱子易学の新たな展開と位置付けられる。そのため、『河洛精蘊』は、河図洛書の自然科学的側面を踏まえて制作された。また、「準（平泉）小時嘗て易を学ぶ。覃く河洛を思ひ、月を累ね歳を積ね、玩索を惜しまず。」（大槻平泉『河洛精蘊』）の記述から、平泉の河図洛書への強い思い入れが読み取れる。

平泉は、朱子学の文脈において河図洛書を理解し、講堂建築の根本に位置づけた。そして河図洛書は、理に基づいた世界観を提示し、養賢堂の政治・学問・教育を支える役割を担ったのである。

2　鑑戒としての障壁画の意義

「河図図」「洛書図」を含む障壁画の意義については、寺澤氏が『養賢堂学制』付属の謡曲「泮林」の記述から障壁画の各画題を解釈して言及されている。[32]「泮林」は、『詩経』魯頌の「翩たる彼の飛鴞、泮林に集う」にみられる語である。諸侯の学校を意味する泮宮、その周囲にある林を泮林という。平泉は諸侯の学校を仙台藩における養賢堂に見立てたとみえる。寺澤氏は、「泮林」を現代語に訳した上で各画題について概説し、「視学所の障壁画にも儒学の教えに基づいた考え方が示され、人として、あるいは君主としての、道徳観や学問に関わる画題がここに選択されている」と述べる。ここでいう「儒学の教え」とは、朱子学のことであり、障壁画の意義については朱子学に基づいて考える必要がある。また、氏は障壁画について漢文で記述する「邦君視学所画記」を紹介される。内容に関して謡曲と比較すると、その熟語には典拠の存在するものが認められるため、本節では「邦君視学所画記」等の所収史料に基づき、障壁画の意義や空間の役割について、朱子学の文脈を踏まえ考察する。

障壁画の画題にはそれぞれ意義があり、①植物（梅、松）②腰板の動物（虎、雁、黄鳥、蜂蟻、雎鳩）、③詩題画（魚、鳶）、④祥瑞・起源（河図洛書、蒼頡）、⑤祥瑞・鳳凰（鳳凰、桐、竹）の五種に分類できる。尚、①から④は北の正室側、⑤は南側の堂に描かれた画題である。

「邦君視学所画記」には、障壁画の意義について記されている。書き下しは、杉本氏の論考を参考にした。[33] 記述に即して、各画題の意義について述べる。まず障壁画を描く前提として、平泉は後半部において、「この画を為すは、固より旨趣あり。教えにあらざることなきなり。」と述べる。視学所の障壁画は、教え、つまり教育を目的として制作された。儒学における教育とは、社会規範の実現の手段としての教化と個々人の学問修養であった。藩校教育の場である講堂において、学問修養を目的とした絵画が描かれるのは自然である。

絵画の役割を教化のためとする考え方は、中国初の画史書である

『歴代名画記』（張彦遠（八一五頃～七六頃）撰、八五三）に既に現れる。[34] 人々を教化する役割を持つ絵画は「鑑戒画」と呼ばれる。儒教的な道徳に基づくこの絵画認識は、東洋において伝統的に受容され、養賢堂の障壁画にも影響を与えた。

①植物

松と梅は、冬の寒さに耐える植物「歳寒三友」として勧戒画題に用いられる植物である。「邦君視学所画記」において両画題は四季の運行を表しており、梅は「葩にして魁なり」、松は「歳寒いよいよ蔥なり」と説明される。梅は一年の初めに先駆けとして花を咲かせる春の植物、松は寒さの中にあっても青々と生い茂り、葉の色を変えない冬の植物である。さらに、宮城県図書館所蔵の『講堂小誌』所収の「視学所画記」には、「葩にして魁なるは元か、冒寒することいよいよなるは貞か。」という記述も見られ、四方四季に配当される儒教道徳、四徳を表す役割も担ったと推察する。[35]

四徳とは、乾の卦の説明に用いられる語であり、元・亨・利・貞からなる。元は万物の始めを、亨は万物を生育し通達させる働きを表す。利は万物の生育を遂げ調和させる働き、貞は万物を成就させる働きを示す。視学所において梅は元の徳、松は貞の徳を表している。つまり、四季の始まりと終わりを絵画化し、元から貞へと時計回りにつつがなく四季が巡る様を示している。また「品物、その中に流形す。」という語は、『易経』乾の卦爻辞からの引用であり、万物が天理を正しく実現し調和する様を指す。乾の卦爻辞には、品物の流形は四徳の現れとも言及されるため、「講堂所属配当図」において四方四季に四徳を配当する根拠と推察する。

②腰板の動物

儒教における四季の運行は、単なる自然現象ではなく、天の理による調和であり則るべき教えの表れであった。腰板に描かれた動物画には、儒教における基本の徳目である五教（五常五倫）を示す意義があった。五常は、仁義礼智信の五つからなる、人間が天から備わった徳である。一方の五倫は、人間関係において守るべき秩序を父子の親、君臣の義、夫婦の別、兄弟の序、朋友の信の五つに分けた徳目であり、五常に並ぶ儒教倫理の基本である。

『講堂小誌』付属の謡曲「立教」（文政二年、一八一九頃）と併せて考えると、「蜂蟻図」には君臣の義と義、「虎図」には父子の親と仁、「雎鳩図」には夫婦の別と智、「雁図」には兄弟の序と礼、「鹿図」と「黄鳥図」には朋友の信と信、それぞれ五常五倫が表されている。[36] また図書館本の「仁礼は陽、義智は陰、各々その方を処し、信は乃ちこれを兼ぬ。」の記述から、これらの動物画も陰陽と方角の組み合わせに従って配置されているとみる。

特に朱子学においては、仁義礼智信の五常は「本然の性」であり、人の理そのものでもある。朱熹晩年の高弟・陳淳（一一五九～一二二三）は『性理字義』において「五者は之を五常と謂ひ、亦之を五性と謂ふ。」と述べており、五常を五性と呼称している。[37] 加えて謡曲「立教」にも「五常は外の物ならす、則ち天より賜りたる、性とは是を申なり。」とある。平泉は朱子学の文脈において五常を性、人の理として捉えている。つまり腰板の動物画には、人が見習うべき理が性・五常五倫として発現しているわけである。

③詩題画

東洋門人・伊藤東駿が描いた「魚躍図」、「鳶飛図」は、『詩経』大雅早麓篇の「鳶飛びて天に戻り、魚淵に躍る（鳶飛戻天魚躍于淵）」を典拠とする詩題画である。君子の徳が行き渡り、万物が本性のままに遊び平和である様子を示している。「鳶魚上下みな道と照然たり。」の「道」の解釈は、『中庸』冒頭部の「天の命、之を性と謂ひ、性に率ふ、之を道と謂ひ」から窺える。性は理として賦与されたものであり、性に従った生き方を「道」と呼ぶ。朱熹は『中庸章句』において、「蓋し人の人たる所以、道の道たる所以、聖人の教えを為せし所以は、その自る所を尋ぬるに、一として天に本づき我に備はざるは無し。」と、人間や道、教えが天に基づくと解説する。[38] 鳶が空を飛び、魚が水を泳ぐのは、それぞれが性に基づいた生き方、道を体現しているためである。そして人間にとっての道は、朱子学で重視された理、「本然の性」に従った生き方に他ならず、人間行為の規範を表した鑑戒画といえる。

④祥瑞・起源

蒼頡、河図洛書は祥瑞画題であり、いずれも古代中国における伝説を典拠とする。蒼頡は、中国古代の黄帝に仕え鳥の足跡から漢字を作り出した人物である。前漢に成立した『淮南子』には、「昔者、蒼頡の書を作るや、天粟を雨らし、鬼、夜哭す。」とある。[39] 書の誕生に際し、普通にはあり得ない出来事が発生したという。そして文字と書の開発によって聖人の教えの道を記述できるようになり、人々の教化に繋がった。次いで説明される河図洛書は図象によって表される八卦と洪範の起源であり、君子が人々を導く道徳規範となった。

蒼頡と河図洛書の組み合わせは、前掲した『歴代名画記』にみられる。『歴代名画記』冒頭の記述は、鑑戒画の基本概念となる絵画観を示すと共に、祥瑞と書画の関係についても説明する。古代中国における聖王の治世には、教化を為すための方法が、龍や亀などの祥瑞として現れた。伏犠の時代にもたらされた画図は龍図、つまり河図である。後の宋の時代にあたり洛書は河図と一対の白黒点図として理解される。よって、河図洛書は視覚的に教えを示す絵画の起源として捉えられる。軒轅氏（黄帝）の時代に現れた祥瑞を蒼頡が写し、鳥の足跡によって形を定めたものが漢字であり、蒼頡の伝説は書の起源となった。以上のように、『歴代名画記』において書画は、聖人の教えを示す手段として同じ本質を有すると定義される。この認識は、平泉の画題選択に影響を与えたとみられる。

本文では、蒼頡、河図洛書により「物を開きてその務」が成されたとする。この記述は、『易経』繫辞上伝の「夫れ易は、物を開き務めを成し、天下の道を冒ふ。」の引用である。『易経』は、天下万物のまだ知られていない道理を明らかにし、あるべき状態に成し遂げるために存在するという。朱熹においては、「物を開き、務めを成すとは、人をして卜筮を以て吉凶を知り事業を成さしむるを謂ふなり。」（『周易本義』）とあるように、原理的には易により人々を導く過程が「開物成務」であった。朱熹や二程の易学を継承した易学者・兪琰（一二四三～一三一二、あるいは一二二七～九六）は「物を開くとは、物の理の未だ明らかならざるに、易、則ちこれを明らかにするを謂ふなり。務めを成すとは、事の体の未だ定むるを謂ふなり。」（兪琰『周易集説』）とした。[40] 朱子学の理気哲学を承け、「開物成務」は事物の理を明らかにするという意味となった。古代において書は、聖人の教え

である学問を記す手段であった。易は吉凶を占い人々の行動の指針となり、洪範は政治の規範となった。つまり、画題・蒼頡及び河図洛書は、古代中国における「開物成務」の例示である。そしてさらに、明らかになった道理を基に、聖人が人々を教え導き、社会規範が実現される状態をも示している。「蒼頡図」、「河図図」、「洛書図」は仙台藩主と養賢堂に学ぶ武士たちに、為政者のあるべき姿を視覚的に訴える鑑戒画といえる。

視学所北側に描かれた①から④までの画題についてまとめる。①から③までの画題は、物理と道理を一体のものとして捉え、天から与えられた性・理に従って万物が運行する朱子学的な世界観を示している。世界の一因である人間も、自らの性を自覚し、従って生きるために学問修養に励まなくてはならない。そして、障壁画に示された動物、植物に内在する理を一つ一つ極め、自身の人間完成の糧とする過程は、格物窮理に他ならない。④祥瑞・起源においては、道徳を備えた聖人が自身の体得した理を人々へ伝える、民衆教化の一例として蒼頡・河図洛書が描かれる。文字や、易、洪範は、理を究めた人間が生み出した発明、技術であった。『大学』八条目に照らし合わせれば、①から③は「格物・致知・誠意・正心・修身」にあたり、④の障壁画は「斉家・治国・平天下」の段階を表していると考えられる。まず自身を修め、後に人を治める姿勢は、江戸時代の為政者階級である武士に求められた在り方である。以上のように、視学所北側には武士を教育する場としての藩校に相応しい画題が選択されたのである。

⑤祥瑞・鳳凰

「鳳凰図」、「桐図」、「竹図」は、視学所南側の堂と呼ばれる一室に面して描かれた。「蒼頡図」、「河図図」、「洛書図」とは表裏の位置関係にある。

鳳凰は、東洋における架空の鳥である。障壁画にはつがいとして描かれているが、鳳を雄、凰を雌と呼称する。『礼記』礼運篇に「何をか四霊と謂う。麟鳳亀龍、これを四霊と謂う。」とあるように、中国における四種の動物の代表・四霊のうちの一種であり、周代以前から鳥類を支配する存在と認識されていた。前述した『礼記』に加え、河図の典拠でもある『論語』子罕篇では「子曰く、鳳鳥至らず、河図を出さず、吾已んぬるかな。」と言及される。鳳凰は、河図と共に聖人や天子が現れる前兆、つまり祥瑞として捉えられていた。また、『荀子』哀公篇では、「孔子曰く、古の王者、務して拘領する者有り、その政生を好み殺を悪む。是を以て鳳列樹に在り、麟郊野に在る。」とあるように、儒教的な道徳と結びつき、良い政治の証拠とも捉えられた。そして漢代以降、道徳を備えた仁鳥としての鳳凰は、『論語摘衰聖』、『春秋感精符』といった緯書において思想的に形成され、後世に影響を与えた。[41] 中国の歴代王朝において、鳳凰は治世を正当化し礼賛するため根拠として用いられた。前漢に編纂された詩集『韓詩外伝』には、黄帝が即位した際、「鳳乃ち帝の東園に止まり，帝の梧桐に集い、帝の竹實を食べ、没身去らず。」とあり、鳳凰が現れると黄帝が没するまで宮廷の庭に留まったという。また、『淮南子』（前漢、劉安）では、鳳凰は二皇（伏犠・神農）の時代には庭に、三代（堯・舜・禹）の時代には門に、周代には澤に現れたとした。[42] つまり、古代の事例があるように、理想的な治世であれば鳳凰は実際に表れると認識された。実際に、清代の類書『淵鑑類函』（一七一〇）に言及される『史書』、『漢書』、『唐書』、『金五行志』といった歴史書には、鳳凰が現れたという

出来事が史実として記述されている。[43]

「邦君視学所画記」には、「堂則ち鳳凰、梧を栖とし竹を餌とす。山水の秀媚なり。飲啄し爰にその止まるを獲る。」とある。梧桐に住み、竹を餌とするという生態は、前述した『韓詩外伝』や緯書の一種『春秋孔演図』等の記述に基づく。[44]『古事類苑』には、「本邦鳳凰ヲ画ク時ハ、必旁ニ白桐ヲ画ク。唐人ハ必梧桐ヲ画ク。鳳ハ非梧桐不棲、非竹実不食と云時ハ、白桐ヲ画クは謂ナキコトナリ。」とあるため、平泉は鳳凰を中国的な、この場合は儒教の文脈で捉え画題を考案したとみる。[45]また、意義についての記述では「それ然るのち文物盛明し、鳳を取ることあり。」とある。文物盛明とは、天下が栄え学問や文化が盛んとなる様を指す。優れた為政者の治世に現れた鳳凰を、「獲えた」という体で絵画化したのである。鳳凰が来儀するには、天下に徳が行き渡るのみならず、居場所としての庭、特に梧桐と竹が必要であった。よって障壁画には鳳凰に伴い梧桐と竹がそれぞれ描かれた。そして、絵画のみならず講堂の中庭に梧桐と竹を植えた理由も、古代から続く鳳凰来儀の事例に則るためであった。

前述の通り、堂に描かれた「鳳凰図」、「桐図」、「竹図」は起源を示す祥瑞・「蒼頡図」、「河図図」、「洛書図」と表裏の位置関係にあった。さらに述べるならば、視学所北側全体と表裏の関係にあるともいえる。北側の障壁画には、『大学』八条目に示された政治の第一段階としての教育の過程と、為政者のあるべき姿、そして五常五倫が行き渡った世界が示された。そして、正室に表現された理想的な政治に感応し、鳳凰が現れ養賢堂に留まる様子が、堂の障壁画に表現されている。政治により世界に徳が行き渡らなければ、鳳凰は地上に存在し得ない。つまり正室と堂の障壁画は、単なる位置関係に留まらず、意義としても表裏の関係にある。そして、鳳凰が養賢堂に留まり続けることは、世界から徳が失われていないという証左である。よって鳳凰は、仙台藩の武士たちにとって実現すべき目標であり、自らの努力によって持続させるという義務を想起させる画題であった。鳳凰をはじめとする祥瑞画は、吉祥と鑑戒の両面を有していたのである。

障壁画全体の意義についてまとめる。障壁画には、万物が理に従って運行する世界観と、人間の理・五常五倫を学び取り民衆教化に活かす過程、そして徳の盛明を示す祥瑞があらわされた。いずれも朱子学の政治・学問・教育観に基づいており、改革を経た養賢堂の教育への姿勢を体現している。講堂の河図洛書に基づいた構造も踏まえても、教育、建築、絵画など全てにおいて、前提となる理を重んじる平泉の朱子学的な思想が表れている。視学所の空間は、藩主や武士たちに人として、為政者としての在り方を鑑戒として説く。そして、祥瑞が描かれるように、素晴らしい時代の到来を願う吉祥性を内包していたのである。

3　障壁画の役割と背景

学制改革の目的は実用的な人材の教育にあったが、背景には当時の仙台藩を取り巻く社会状況が密接に関係する。仙台藩の内部では、天明三年（一七八三）と同七年の大飢饉により、不安定な体制が続いていた。[46]さらに、寛政二年（一七九〇）に八代藩主・斉村が二十三歳で逝去して以降、幼年の藩主が続き、若年寄の堀田正敦が後見人として就かざるを得ないほど、政治的にも不安定な状況にあった。堀田正敦は、六代藩主・伊達宗村（一七一八～一七五六）の八男であり、寛政二年より松平定信によって若年寄に抜擢された。在任中は『寛政重修

諸家譜』の編集を総裁し、『干城録』を編纂するなど、幕府の編纂事業に携わった。昌平坂学問所の再建にあたり林述斎らと連携して寛政異学の禁を推進するなど、文教政策に尽力したとも知られる。[47] 仙台藩外部の問題としては、ロシアを中心とした海外の脅威が挙げられる。文化元年（一八〇四）九月には、ロシア使節レザノフの長崎来航、同四年年にはロシアが樺太と千島列島、択捉島を襲撃する等の事件が発生していた。文化年間は、全国的に海防が意識され始めた時期なのである。

平泉は、自らの学問修養のため、文化二年（一八〇五）九月までの二年半という長期の遊歴に出ていた。主要な目的地の一つであった長崎滞在の際には、蘭学者・志筑忠雄（一七六〇～一八〇六）にオランダ天文学を学び、中国やオランダの商館・商船を見学し、さらには中国人やオランダ人と交流する機会を得た。長崎における蘭学学習や、様々な援助のための手配には、林述斎、そして幕府若年寄・堀田正敦の助力があった。正敦は大槻玄沢のパトロンとして蘭学を興隆した一方で、日露紛争時には蝦夷地に赴くなど蘭学史、対外交渉史においても功績がある。加えて、鳥類図鑑『観文禽譜』を著すなど、国内外の学問に関心が深かった。蘭学の有用性をいち早く理解していた正敦は、昌平坂学問所においても優秀な人材であった仙台藩出身の平泉を教育する目的で、長崎での遊学を援助したとされる。レザノフの長崎来航を現地で経験した平泉は、自身の見聞集『経世体要』において、ロシアは今後日本の脅威となる可能性に言及し、海防の重要性を提示した。[48] また、蝦夷地や仙台を含む奥州の用地に鎮守を設置し防衛するといった対外論を展開した。具体的な防衛策として、戦艦による往来の船舶の監視を挙げるが、平泉は西洋の火器への対抗策として城堡の建設を急務とした。そして城堡の立て方を蘭学書に求め、蘭学者やオランダ通詞についてオランダ語を学ぶよう提言した。平泉は儒学を学んできたが、積極的に蘭学の摂取を試みている。平戸における捕鯨見物・調査の経験を詳細に記録した捕鯨百科全書『鯨史稿』（文化五年、一八〇八）全六巻の執筆も、その一例である。[49] 朱子学の外的認識や博学多識を重視する性質、そして平泉を援助した林述斎と堀田正敦の意向を考慮すれば、平泉の蘭学受容の姿勢は自然といえる。

以上のように、平泉は、自身の遊歴の経験から開明的な学問観を身につけ、学制改革において数学、医学、蘭学、洋学など実学の積極的な導入を図った。学制改革の目的は、藩政の立て直しや海防といった諸問題を解決するための人材教育であり、経世済民であった。その根底には、新たな学問によって人々を教化するという、朱子学に基づいた政治・学問・教育観が存在した。寛政異学の禁においては、社会を統合する理念として朱子学は再認識された。そして仙台藩においても、藩校は教育の場、民衆教化の中枢として重視された。よって、講堂には『大学』八条目の政治実践の過程や、民衆教化を象徴する祥瑞が絵画化された。視学所障壁画は養賢堂の学問観を視覚的に表現し、講堂の構造としての河図洛書は、仙台藩の武士たちを支える思想的基盤の役割を担った。平泉は、自らが設計した教育の場において、朱子学による合理的な実践と開明的な学問観を備えた人材の育成を期待したのである。

4　「大舜命契図」と障壁画

講堂落成から二年後の文政二年（一八一九）、視学所の床の間に新たに制作された東洋筆「大舜命契図」が掛けられた。『講堂小誌』所収の「立教」及び「大舜命契画幅記」（文政二年、一八一九）には、

図16　「大舜命契図」『養賢堂学制』

図17　東東洋「大舜命契図」
仙台市博物館蔵

図18　東東洋「大舜命契図」
個人蔵

その経緯が記される。障壁画と同様に略図が『講堂小誌』に収載され（**図16**）、仙台市博物館に副本とされる作品が所蔵される（**図17**）。また、原本とみられる個人蔵の作品が大林昭雄氏の論考に掲載される（**図18**）。「大舜命契図」は『書経』舜典の「帝曰く、契、百姓親しまず、五品遜はず。汝司徒と作なり、敬て五教を敷き、寛に在れと。」を典拠とする。[50] 皇帝である舜が、家臣たちに世を治めるための指示を下す場面である。舜は、家臣の一人・契に対し、教育を司る司徒という役職を与え、五教（五常五倫）を民衆へ広めるよう命じた。君主の命により教育を推進するという逸話は、養賢堂における学制改革の在り方にも通ずる。

改革実行期の藩主であった十代・斉宗は、講堂が落成して二年後の文政二年（一八一九）四月に逝去した。「大舜命契画幅記」によれば、生前の斉宗は、自ら賛を施した「大舜命契図」を視学所の床の間に掛けるよう命じていた。しかし、程なくして逝去したため、取り止めとなっていたところ、後を継いだ十一代藩主・斉義（一七九八～一八二八）の意向で実現したという。[51] 以下、筆者による書き下しを掲示する。

講堂成るの明年十二月、英山公肇めて講堂に涖み、大いに学官を饗す。厥の明年四月、公即世す。国相川口邑主遠藤元長、公の遺旨を奉じ、（中略）大舜契に命ずるの画幅を視学所の正壁に掲げしむ。進みて画幅の前に至りて北面し、扶服し拝し畢りて位に復す。乃ち凡そ列に在る者を諭して曰く、ああ爾衆官と諸生、予明に汝らに告ぐ。先公、政を為すに仁に拠り、既に己に学を興し、画を洋（東東洋）に命じ舜と契とを絵す。その誥誡の語、躬

親して之に書く。掲げて以て学館諸生を観るに、またなお大舜の契に命ずるがごときなり。則ち公の自ら期する所以は、以て人に望む所と与にす、盛意昭昭たるや此の如し。ああ公、大志を抱きて果たさず、中道にして即世す。昊天、何ぞ恵まれずや。然りと雖も、嗣君は仁孝にして紹述茲に在り。爾衆官と諸生、往勉なるかな。大舜の契に命ずる、清準（大槻平泉）それこれを推明す。清準、拝して稽首し、その義を推明して曰く、人の道あるや、居然として飽暖に甘んじ、教以て之を検べる無し。飛走なんぞ選ばん。惟だ舜之を惻み、契をして司徒と為さしむ。これに命じて曰く、敬て五教を敷き寛に在れ、と。これ舜の天明に則りて人倫を教える所以なり。　（大槻平泉「大舜命契画幅記」『講堂小誌』）

「大舜命契画幅記」が記された文政二年十二月、斉宗の遺旨を遂げるにあたって、内務長官の中村景房、学頭、副学頭と学職百三十人あまり、生徒数百人あまりが講堂に集まった。そして学頭の平泉により、前述した「大舜命契図」の画題の意義と、作品に込められた斉宗の藩校教育への期待が述べられた。平泉は、聖人可学論に基づいた教育観について言及し、人々を教化できるかどうかの責任は平泉を含む学職にあるとして、藩校教育に対する覚悟を表明した。

本作品の製作時期について、講堂障壁画制作の後であり、文化十四年（一八一七）の制作とする説がある。[52]『六代治家記録』巻六十六英山公七文政元年十二月十三日の条には、「養賢堂ヘ営築始テ臨ス奉行以下大槻民治（平泉）等ヘ酒饌ヲ賜フ畢テ民治礼記ヲ講ズ」とあり、落成した講堂を斉宗が訪れたのは文政元年十二月が初めてであったとわかる。[53]その二日後、平泉らの講堂落成に対する功を賞したのちに、斉宗が養賢堂を訪れた記録は無い。さらに文政元年冬に記された「邦君視学所画記」には、「大舜命契図」についての記述は無いうえ、障壁画の意義を説明する際に舜の治世に対する特別な言及もみられない。ここから、斉宗が初めて養賢堂を訪れた際に「大舜命契画幅記」の制作を命じたと考えられる。よって、本作品の制作時期は文政元年十二月以降、斉宗が賛を記すことができたのは文政二年に入ってからと推測できる。

一方、謡曲「立教」には、「大舜命契画幅記」の出来事が平泉の一人称という形式で述べられる。[54]

此君世にましますの時、大舜契に仰せし図に本文を題し給ひ、学館に掛よと仰ありしか、幾程なく隠れさせ給ひて候程に、しはし其事やみて候か、嗣君紹述の御志いや深く、廃れたるをも挙げ行われ候折から、今日吉日にて候へは、先君の御筆を学館に掛奉り、深き思召をも人々にしらせはやと存候、かけまくも賢き君か仰言、しはしやめをく日数立、はや二年に成りにけり、（中略）実有難き御事かなと、立より御筆を受けとりて、視学所の正面にこそか、かけけれ、いかに人々御覧候へ、此御筆の文にいわく、敬て五教敷寛にあれとの御事なり、是昔大舜契に仰せて宣ひし文なり、先君御筆を染給しも、すなはち同じ御心なり、（中略）

実や虞舜の御代こそは、〳〵、五倫のをしへ明らかに、道有る御代や鳳凰の、いたれる徳を後の世の今にいたりて仰くらん、かく治まれる御代なれは、民の和らくをしへとて、舜の作れる韶の楽、類ひも名にそ聞のみか今も御国に伝われる、五常楽は是なれや、今もをしへの普くて、国とみ民も饒かならは舜の御代にも劣

るまし、いささらはとても猶、其舜の世の例にて、五常楽を舞ふへしや、有難の折からや、〳〵、教へも楽も舜の世の、其有様を今爰に、うつすや是も世の鏡、幾千代かけて照らすらん、仰くも愚かか、る世に、すめるやいつこ道のくは、実民草もゆたかにて恵み普ねき我君の、栄行末を猶頼む、此音楽の調子こそ、民の和らく基ひなれ〳〵

（『養賢堂学制』「立教」）

作品の製作経緯については「大舜命契画記」と共通しているが、人の道理を五常五倫として説明し、四季の運行を天の教えの現れとするなど、障壁画にも現れた朱子学的な思想が見てとれる。また「立教」では、平泉は舜の時代には鳳凰が現れる程の徳が行き渡っており、仙台藩も劣らないと述べる。加えて平泉は日本に伝わる五常楽は、舜が作ったとされる楽曲・簫韶と解釈する。『書経』皐陶謨によれば簫韶は「簫韶九成して、鳳凰来儀す。」[55]とあり、鳳凰を呼ぶほどの徳を秘めた楽曲であった。儒教における楽とは礼楽刑政のうちの一つであり、民心を和らげ天下を平らかにする手段である。[56]よって五常楽は、舜の時代における徳を仙台藩に伝えるために視学所において演奏されたと考えられる。このように、平泉は「立教」において、仙台藩の理想の姿として舜の治世を想定したとわかる。

「邦君視学所画記」には、教育によって世界の理を体得し、民衆を強化してゆく過程と、文物が盛んとなった結果として現れた鳳凰が障壁画の画題に用いられたとあった。古代の治世を理想とする姿勢はあったものの、具体的な王の名前についての言及はなかった。『講堂小誌』所収の謡曲には、「立教」のほかに「視学」、「泮林」がある。「視学」の内容は斉宗が文政元年十二月に初めて養賢堂を訪れた際の出来事であり、「泮林」は講堂落成時の祭事に基づいている。[57]それぞれの謡曲においても講堂や障壁画の意義が述べられるが、「立教」を除いて舜に対する言及はない。つまり、平泉が舜の時代を理想とする思想は「大舜命契図」の制作以降に形成されたといえる。前述の通り、「大舜命契図」は、文政二年十二月から視学所の床の間に掛けられ、障壁画と一体となった。斉宗の死を契機として、視学所の空間は、新たに舜の治世という意味が付与されたのである。

「大舜命契図」は皇帝が家臣へ教育の推進を命じるという逸話を表現した作品であった。「先君御筆を染給しも、すなはち同じ御心なり」とあるように、斉宗も舜と同様に、教育によって国を太平にして欲しいという期待があった。この場合の国とは仙台藩であり、五教を広める人物である契は養賢堂の学頭・平泉となる。斉宗は、実用的な人材の教育によって、藩が抱える諸問題の解決を目指す武士たち、加えて教育の中心に位置する養賢堂の長であった平泉の姿を契に重ねた。斉宗の「敬敷五教在寛」という言葉が賛を通して平泉に送られることで、「大舜命契」の逸話が改革を経た養賢堂において再現されたのである。亡き斉宗の願いが込められた「大舜命契図」は、養賢堂の藩士たちにとり、教育・政治への姿勢をより強固にする作品であったのである。

おわりに

仙台藩校・養賢堂の障壁画の意義について、「河図図」「洛書図」を中心に再検討を行った。養賢堂障壁画は、作品のほとんどが失われ、講堂が焼失したにも関わらず、『講堂小誌』等の関連史料により、製作背景が判明する稀有な事例である。本稿においては、障壁画に現れ

た依頼者・大槻平泉の思想を解釈し、当時の社会状況との関連を示すという手法をとった。平泉の朱子学者としての思想は、仙台藩内部の諸問題の解決を目指した学制改革と直接関係していた。朱子学的思想に厳密に基づいた障壁画は武士への鑑戒であると同時に、天下太平の到来を願う吉祥としての意味を持っており、他に類を見ない特殊性を有する。しかし、その目的は人材教育による経世済民であり、寛政異学の禁から続く政治思想を継承していた。十代藩主・斉宗が「大舜命契図」の制作を命じた事実も、儒学を重視する姿勢が窺える。養賢堂の障壁画は、文化文政年間における政治教育思想のあり方を物語る事例といえる。

十八世紀後半には、松平定信により古画や古像の模写、尚古的文献の編纂事業が行われたように、絵画そのものの意義が意識された。養賢堂の絵画は、政治・教育を巡る一連の思想の中で絵画が役割を果たした一例ともいえる。本稿における研究手法が必ずしも有用とは限らないが、他藩における絵画の製作事業を個別的に研究することで、近世後期から幕末に至るまでの絵画の意義について、政治史・思想史的な観点から成果を見出せるであろう。

また、文化文政年間における絵画の意義の再考は、画家研究にとって重要である。障壁画の作者・東東洋に関しても、仙台四大家の一人としてではなく、より広い視野で捉える必要がある。東洋は、「法眼」としての僧位を得ており、京都において門跡寺院や中宮御所に出入りできるほどの画家であった。御用絵師として制作を任命される要因として、経歴がどれほど重要であったかは判然としない。加えて、朱子学を典拠とする障壁画を制作するためには相応の教養が求められるが、御用絵師に求められる教養の度合いと実情に関しても明らかではない。本研究を進展させるには、引き続き諸藩の御用絵師の画業について、研究を深化させる必要がある。今後はその手がかりとして、本稿で言及した妙法院蔵「真仁法親王像」を中心として、東洋の画家像に迫りたい。

【註】

(1) 以下、参考とした文献を記載する。濱田直嗣「東東洋と養賢堂」(『仙台郷土研究』復刊第十三巻一号　仙台郷土研究会　一九八八)、寺澤慎吾「研究ノート　東東洋筆「河図図」についての考察―養賢堂学頭・大槻平泉の講堂建築と絵師・東東洋の画用における位置付け―」(松浦清・真貝寿明編『天文文化学序説―分野横断的にみる歴史と科学―』(思文閣出版　二〇二二))。

(2) 『大條孫三郎道徳と伊達宗亮：幕末を生きた仙台藩士の生涯：企画展』(山元町歴史民俗資料館　二〇〇九)三～六頁。

(3) 以下、参考とした文献を記載する。大林昭雄『東東洋全傳』(ギャラリー大林出版　一九八八)、三浦三吾『近代美術の鑑賞Ⅰ　東東洋』(仙北印刷センター　一九九三)、内山淳一「仙台四大画家―東洋・曲玉・梅関・伊州―」(仙台市史編纂委員会編『仙台市史　特別編三　美術工芸』仙台市一九九六)、三浦三吾『京都・妙法院写生派絵師　仙台藩東東洋』(仙北印刷センター　二〇〇四)、杉本欣久『研究成果報告書　東北画人基礎資料集』(二〇二二)。

(4) 以下、参考とした文献を記載する。渋沢栄一『楽翁公傳』(岩波書店一九三七)、衣笠安喜「折衷学派と教学統制」(『岩波講座日本歴史　第十二(近世四)』(岩波書店　一九六三)。

(5) 『議奏御役中雑記』文化十三年(一八一六)六月二日条(京都大学貴重資料デジタルアーカイブ、四〇三頁)。

(6) 養賢堂に関する研究は以下の通りである。仙台市史編纂委員会『仙台市史通史編五近世三』(仙台市　二〇〇四)、佐藤賢一『国宝大崎八幡宮　仙台・江戸学叢書三六　仙台藩の和算』(大崎八幡宮　仙台・江戸実行委員会二〇一四)。

(7) 『経世体要』は『仙台叢書二』(仙台叢書刊行会　一九二三)一三九～二〇八頁、「家譜書出」(宮城県図書館所蔵)は、仙台市史編纂委員会『仙台市史　資料編二近世一』(仙台市　一九九六)三五四～三六〇頁に収録される。なお、大槻平泉に関する研究は以下の論考がある。鵜飼幸子「養賢堂の学制改革について―桜田欽斎、志村篤治の反論を中心に―」(『仙台市博物館調

査研究報告書』二号　一九八二）、王一兵「堀田正敦と仙台藩の学制改革―洋学の導入とその要因――」（東北大学博士論文　二〇二〇）。

（8）『仙台叢書』巻一八（仙台叢書刊行会　一九三六）所収、一四七～一五一頁。

（9）小井川百合子「蔵書目録にみる仙台藩の文化活動」（朝倉治彦監修・小井川百合子編集解説『蔵書目録にみる仙台藩の出版文化　第一巻　書誌書目シリーズ八〇』（ゆまに書房　二〇〇六）。

（10）大槻平泉『講堂小誌』（大槻平泉『養賢堂学制』　一八九二）。上記所収の引用資料「立教」、「講堂制度」、「大舜命契画幅記」の翻刻及び書き下しは、筆者による。

（11）小倉強監修『実測図仙臺及び近郊の古建築』（北匠会　一七九三）。

（12）以下、参考とした文献を記載する。鈴木由次郎『全釈漢文体系第九巻　易経上』（集英社、一九七四）、同『全釈漢文体系第十巻　易経下』（集英社、一九七四）、安居香山、中村璋八『重修　緯書集成　巻六』（明徳出版、一九七八）、小野沢精一、福永光司、山井湧編『気の思想―中国における自然観と人間観の展開―』（東京大学出版会　一九八〇）、吾妻重二『朱子学の新研究』（創文社　二〇〇四）。また、以下の『朱子語類』、『大学章句』格物補伝の書き下しは、吾妻氏の論考による。

（13）朱熹の理気論について、気は天地間の自然現象を引き起こすのみならず、人間や生物の身体、それらの五感等の諸機能、さらには感情・思考・欲望などの心の動きをも司る。朱熹の理気哲学においては、世界に存在する事物は全て理と気によって成立し存在する。事物の物質の面は気によって出来上がり、その前提として事物の在り方を規定する根拠・原理・法則が理であった。朱子学における理にはあらゆる事物の根本原理であり、「所以然の故（そのようである原因）」と「所当然の則（当然そうあるべき法則）」と説明される。つまり、事物の存在の根拠、事物を事物たらしめる本質的な要件と、事物のあるべき理想的な在り方を指す。理は、一年を通じた四季の巡りや、水が高所から低所へ流れるといった自然現象の法則のみならず、鳥が空を飛ぶ、魚が水の中を泳ぐなどの生物の在り方や本質をも規定する。そして人間について述べるならば、理は人間としての正しい在り方や振る舞い、道徳の法則をも指す。脚註については、註（12）前掲論考を参考とした。

（14）辻本雅史『近世教育思想史の研究―日本における「公教育」思想の源流―』（思文閣出版　一九九〇）。

（15）格物窮理における博学の重要性について補足する。

蓋しこれ道理該はざる所無く、在らざる所無し。且つ礼楽射御書数の如く、許多の周旋文章品節の繁の升降、豈に妙道精義有らんや。只だ是理会を要し、熟時を得て理会するも、道理便ち上面に有り。又た律暦、刑法、天文、地理、軍旅、官職の類の如く、都て理会を要す。（中略）若し只だこの些子を守り、那裏に定在するを捉り、許多把り都て閑事に做り、便ち都て了る事無し。此の如く、只だ門内の事を得て理会し、門外の事便ち了るを得ず。聖人教人の博学を要する所以なり。二字力説す。

（『朱子語類』巻一一七）

（16）元の授時暦は、元代に五年をかけて作成され、至元十七年（一一七〇）に完成した。制作に最も貢献した郭守敬（一二三一～一三一六）、王恂（一二三五～一二八一）、許衡（一二〇九～一二八一）の三人は朱子学の強い影響下にあった。特に許衡は、元代を代表する朱子学者であり、暦理に精通していたという。先行研究には、「授時改暦は、元初の朱子学派がその俊秀を結集して遂行した、集団的事項であった」という指摘もあるように、授時暦の画期性は朱子学の理念に起因すると考えられるのである。次に、『本草綱目』である。『本草綱目』五十二巻は、医業の家系出会った李時珍（一五一八～一五九三）が二十七年をかけ、万暦六年（一五六八）に完成させた。同書の凡例では、「医家の薬品と雖も、其の性理を孝釈するは、実に我が儒の格物の学にして」と本草研究を「格物の学」と呼んでおり、草部には「医者の貴きは格物に在り」との言葉を残している。医学や本草学が明確に格物窮理の学として扱われていたとわかる。最後に、中国伝統科学を代表する産業技術書『天工開物』である。著者の宋応星（一五七八～?）は、同書の序文において、出版を援助した涂紹煃（一五八二～一六四五）について、「誠意、天を動かし、心霊、物を格す」と評しており、格物窮理との関係が窺える。このように、近世中国における科学技術の功績は格物窮理を踏まえた方法論によって発展してきた。『天工開物』をはじめとして、『農政全書』、『崇禎暦書』など科学技術書の思想背景に、格物説に支えられた実学尊重の精神を指摘する先行研究も存在する。脚注については、以下の文献を参考とした。
山田慶児『授時暦の道―中国中世の科学と国家』（みすず書房　一九八〇）

二三九頁、註（12）前掲吾妻氏論考三八〇頁、薮内清訳『天工開物』（平凡社・東洋文庫　一九六九）、薮内清「天工開物」について（薮内清編『天工開物の研究』（恒星社　一九五三所収））。

（17）註（4）に同じ。

（18）以下、参考とした文献を記す。渡辺浩『近世日本社会と宋学』（東京大学出版会　一九八五）、頼祺一『近世朱子学派の研究』（渓水社　一九八六）。

（19）松平定信『花月草紙』（『日本随筆大成　新装版〈第三期〉一』（吉川弘文館　一九九五））。

（20）註（12）に同じ。また、引用文献『易経』、『尚書（書経）』、『論語』、『礼記』の書き下しは、以下を参考とした。

吉田賢抗『新釈漢文体系一　論語』（明治書院　一九六〇）、竹内照夫『新釈漢文大系二八　礼記上』（明治書院　一九七一）、鈴木由次郎『全釈漢文体系第九巻　易経上』（集英社、一九七四）、同『全釈漢文体系第十巻　易経下』（集英社、一九七四）、加藤常賢『新釈漢文大系二五　書経上』（明治書院　一九八五）。書き下しについては、以下の引用も同様である。

（21）高仁徳「メディアの観点からみた河図洛書論争」（『慶應義塾中国文学会報』二号　二〇一八）。

引用文献については以下を参考とし、筆者が書き下しを行った。孔安国注『尚書』（十三経注疏本、芸文印書館　一九七九）、班固『漢書』（中華書局　一九六二）。

（22）鄭玄撰『鄭氏周易注』（芸文印書館　一九六七）。書き下しは筆者による。

（23）栗原圭介『新釈漢文体系一一三　大戴礼記』（明治書院　一九九一）書き下しは上記を参考とした。

（24）朱熹撰『易学啓蒙』（中文出版社　一九七五）。書き下しは筆者による。以下の引用も同様である。

（25）小島憲之、木下正俊、東野治之校注訳『新編　日本古典文学全集』巻六（小学館　一九九四）。

（26）註（1）寺澤氏論考。

（27）藤岡通夫『京都御所』（中央公論美術出版　一九八七）、『皇室の至宝六　御物　障屏・調度Ⅰ』（毎日新聞社・至宝委員会事務局　一九九二）。

（28）柴野彦助『負文亀』（書写年不明　早稲田大学図書館蔵）。

（29）註（1）寺澤氏論考。

（30）大槻平泉「河洛精蘊」、『平泉著書序目』（成立年不明　宮城県図書館蔵）所収。翻刻及び書き下しは筆者による。

（31）以下の文献を参考とした。川原秀城「律暦淵源と河図洛書」（『中国研究集刊』十六号　一九九五）、川原秀城『数と易の中国思想史―術数学とは何か』（勉誠出版　二〇一八）。

（32）註（1）寺澤氏論考。

（33）註（3）杉本欣久『研究成果報告書　東北画人基礎資料集』（二〇二二）。

それ四時の運、梅において顕れ、松において貫く。品物、その中に流形す。五性、なんぞ択ばん。人物もみな同じ。これを以て蜂蟻微蟲、なお君臣あり。威虣、虎のごとし。父子最も親し。雎鳩翎禽、撃してまさに別れんとす。聚りて相衛る。且つそれ鹿と黄鳥は友道を嘉爾す。すなわちここに達観す。仁義礼智その排、行を成す。ただ信は左右を兼ね、ここに五常を存せり。それ民庶物類の蕃は、林々として生じ、総々として居る。物を開きてその務を成す、孰かよくこれを裁せん。蒼頡出て文字起り、道芸ここにおいて紀す。いまそれ鳶魚上下みな道と照然たり。教えにあらざることなきなり。然りと雖もその象は泛然として、天もまた図書を以て観る。而して民生終日、言はここを離れざるなり。それ然るのち文物盛明し、鳳を取ることあり。これこの画を為すは、固より旨趣あり。教えにあらざることなきなり。然して興学、主るところ、孰れかここに在ると曰ふ。必ず教法あると曰ふ。それ教法の詳のごときは以て他日を竢つ。

（大槻平泉『講堂小誌』「邦君視学所画記」）

（34）張彦遠『歴代名画記』（八五三）序文

夫画は教化を成し、人倫を助け神変を窮め幽微を測り、六籍と功を同じくし、四時と並び運り、天然に発し、述作に繇るに非ず。古先聖王、命を受け籙に応ずれば、則ち亀字は霊を効して龍図は宝を呈するあり。巣燧より以来みなこの瑞あり。迹は瑤牒に映じ、事は金冊に伝わる。庖犧（伏犧）氏、滎河の中より発して、典籍・画図萌し、軒轅（黄帝）氏、温洛の中より得て、史皇・蒼頡状す。奎には芒角ありて下は辞章を主る。頡は四目を有し、仰いで垂象を観る。因りて鳥亀の跡をならべ、遂に書字の形を定む。是の時、書画は体を同じくして、未だ分れず、象制は肇め創せられて猶略なり。以て其の意を伝ふる無し、故に書あり。以て其の形をしめす無し、故に画あり。天地、聖人の意なり。

（張彦遠著、長廣敏雄訳注『歴代名画記』、東洋文庫、一九八五）。

（35）大槻平泉『講堂小誌』（写本　宮城県図書館蔵）。

（36）石川忠久『新釈漢文大系一一二　詩経下』（明治書院　二〇〇〇）。書き下しも上記を参考とした。

（37）大槻平泉『養賢堂学制』「立教」（一八九二　宮城県図書館蔵）。

国つ光も増鏡、〳〵、てらすをしへのあまねき、抑是は東国方国主の老臣元長也、扨も先君は賢明の徳まし〳〵て、常に賤か業までも御心を留め給ひし程に、民の竈も賑ひて候、去程にをしへの道のもみちのくに、いつまて草

の雨露と、潤ふ恵みを国人も仰奉理候処に、はからすも君世を去り給ひ、深き思召も空しくなり給ひて候程に、左なから双涙袂を湿して候、此君世にましますの時、大舜契に仰せし図に本文を題し給ひ、学館に掛よと仰ありしか、幾程なく隠れさせ給ひて候程に、しはし其事やみて候か、嗣君紹述の御志いや深く、廃れたるをも挙げ行われ候折から、今日吉日にて候へは、先君の御筆を学館に掛奉り、深き思召をも人々にしらせはやと存候、かけまくも賢き君か仰言、しはしやめをく日数立、はや二年に成りにけり、時を経て猶たみ草も道のくの、〳〵、雨露繁き青葉山、かゝる恵みの広瀬川、深きはあふせの言の葉を、しはしかけてそ仰きみん、〳〵、恵ある、代にあふ坂の道広く、行くも帰るも、君仰〳〵、是は此学校の長として、明暮経書を講する者にて候、夫治まる御代のしるしとて、聖の道は誰とても、学はぬ者はなかりけり、殊更けふは先の代の、君書ませる筆の跡、此講堂にかけんため、国老来たり給ふにより、百余人の学官を始として数百人の諸生にいたる迄おひしられ此君の、〳〵、をしへを四方に敷しまの国の中にも道のくの、黄金の花は山のみか、道の光も名に高き、〳〵、いかに学督に申へき事の候、是こそ深き思召により、学館に掛よと仰せ給ひし御筆にて候、はや〳〵、是をか、けられ候へ、実有難き御事かなと、立より御筆を受けとりて、視学所の正面にこそか、かけけれ、いかに人々御覧候へ、此御筆の文にいわく、敬て五教敷寛にあれとの御事なり、是昔大舜契に仰背て宣皮ひし文なり、先君御筆を染給しも、すなはち同じ御心なり、恵みの程を仰き給へ、実に五教は五倫のをしへ、五品の道の其趣意を、委しく示して聞せ給へ、我ら不肖にて候へとも、兼て教職をも承り候間、荒増演説いたし候へし、抑五教といつは人倫を五品に分けし教へなり、五品は遁れぬ身のついてにて候程に、親義別序信五ツの別ちを立てられて候、人として五倫の道を失ふときは、人の形に叶はねは、聖人是を憐ひ給ひ、仮初ならぬ事そとて、いかにも民をいたはり給ひ、此教へを示されたるとこそ承て候へ、聞はいよいよ有かたや扨々人倫のをしへとは、聖人の作為に立られたる、教へなるかや不審なり、いや〳〵聖人の作為にあらす、則ち人々身にそなはる、五常に本づく教へなり、然らば五常の基本は、如何なる謂れにあるやらん、五常は外の物ならす、則ち天より賜りたる、性とは是を申なり扨々性といふ事は、人の有生の其初、天に受けたる道理なり、道理に悪はなきものを、善と悪との交ちるとは愚かなりける二人云ひ事かな同上実有難や人の身に、か、かる教へのなかりせは、五倫の道も乱れなん、されは唐土我が朝と、国はかわれとむかしより、聖のをしへ隔てなく、治る道そありかたき、夫聖人のをしへといつは久堅の、天より出し道なれは、五倫を離る、、事あらし、然れは人の生る、始には、天より人の璽として、五常の性を賜ふとかや、されは人々身にはみな、五ツのついてあるそかし、元是五行の相生なれは、五常に本つく、をしへなり、抑人倫の夫婦は五倫の始なり、智の別ちある別の道、又それよりは父子の親互に見捨ぬ仁なれや、父子より分る兄弟の序ての道は礼そとよ、扨長幼の礼あれは、道を学ふや朋友の、互ひにたすけたすくるは、実ますある信そかし、学へは仕ふ君臣の義は義の性のはたらきなり、然れとも生れきにきける始より身にそなはるもしらされは、聖人教へを立てられたり、をしへといふは人のみか、天にも四季の教へあり、まつ始には梅かえに、来ゐる鶯鳴しより柳桜の色ふかき、春過夏になりぬれは木々の梢は深緑、空に鳴なる郭公、過ればやかて萩の葉に、秋をしらする風の音、花のいろ〳〵、虫の声、菊ももみちも過往けは、雪は梢の花と見るつら、は玉の軒なれや、是目前の天の道、時にたかはぬ教へにて、天は物を云されとも、四時行れ百物生る、実久堅の天の道、尽くせぬをしへなりけりや、まして仁義を保つ身は、四肢のわさまて具れは、生きとしいける年月は、人の璽しを失なはて守るそ道のかなめなる、実や虞舜の御代こそは、〳〵、五倫のをしへ明らかに、道有る御代や鳳凰の、いたれる徳を後の世の今にいたりて仰くらん、かく治まれる御代なれは、民の和らくをしへとて、舜の作れる韶の楽、類ひも名にそ聞のみか今も御国に伝われる、五常楽は是なれや、今もをしへの普くて、国とみ民も饒かならは舜の御代にも劣るまし、いささらはとても猶、其舜の世の例にて、五常楽を舞ふへしや、有難の折からや、〳〵、教へも楽も舜の世の、其有様を今爰に、うつすや是も世の鏡、幾千代かけて照らすらん、仰くも愚かか、る世に、すめるやいつこ道のくは、実民草もゆたかにて恵み普ねき我君の、栄行末を猶頼む、此音楽の調子こそ、民の和らく基ひなれ〳〵、

(38) 安藤昌益著、安永寿延編『稿本 自然真営道　大序・法世物語・良演哲論』(平凡社　一九八一)。

(39) 楠山春樹『新釈漢文体系五四　淮南子上』(明治書院　一九七九)。

(40) 今井宇三郎、堀池信夫、間嶋淳一『新釈漢文体系六三　易経下』(明治書院　二〇〇八)。

(41) 以下、参考とした文献を記す。安居香山、中村璋八編『重修　緯書集成　巻四上』(明徳出版　一九八八)、安居香山、中村璋八編『重修　緯書集成　巻五』(明徳出版　一九九二)。

(42) 註(36)に同じ。

(43) 張英、王士禎ほか『淵鑑類函』(上海古籍出版社　一九九二)。『荀子』、『韓詩外伝』等の所収史料の書き下しは筆者による。

(44) 春秋緯の一種『春秋孔演図』(前漢)には、「丹穴に生き、梧桐にあらざれば棲まず、竹実にあらざれば食わず、醴泉にあらざれば飲まず。」(書き下しは筆者による。)とある。

なお丹穴は、南方にあり、太陽の真下に位置する山と考えられた。よって、鳳凰図に描かれた山水は丹穴であり、視学所の南方に描かれた根拠であったと考えられる。

(45) 『古事類苑』動物部（吉川弘文館　一九八五）九九〇～一頁。

(46) 仙台市史編纂委員会編『仙台市史　通史編五近世三』（仙台市　二〇〇四）。

(47) 以下、堀田正敦について参考とした文献を記す。

鈴木道男「堀田正敦周辺の博物研究と松平定信：堀田正敦の『觀文禽譜』（五）」（『国際文化研究科論集』巻六　一九九八）

王一兵「堀田正敦と仙台藩の学制改革――洋学の導入とその要因――」（東北大学博士論文　二〇二〇）。

(48) 大槻平泉『経世体要』（文化三年、一八〇六）、『仙台叢書』二（仙台叢書刊行会　一九二三）。

(49) 森弘子・宮崎克則「文化五年、大槻清準『鯨史稿』成立の政治的背景」（『西南学院大学国際文化論集』二五巻二号　二〇一一）。

(50) 加藤常賢『新釈漢文大系二五　書経上』（明治書院　一九八五）。

(51) 「大舜命画幅記」の全文を記す。

講堂成之明年十二月、英山公肇涖二講堂一、大饗二学官一、厥明年四月、公即世、国相川口邑主遠藤元長奉二公遺旨一、是歳十二月癸巳、朝率二内務長官村景房一、大会二講堂一、学督大槻清準、左右副学大内定盛千葉彝胤、暨学職一百三十余員、諸生数百人咸臻、国相位二于学室東北隅一西而、令レ掲二大舜命レ契画幅於視学所之正壁一、進至二画幅前一北面、扶服拝畢復レ位、乃諭二凡在レ列者一曰、嗟爾衆官暨諸生予明告レ汝、先公為レ政拠レ仁、既已興レ学、命二画洋一絵二舜与一レ契、其誥誡語躬親書レ之、掲以観二学官諸生一、亦猶二大舜命一レ契也、則　公之所二以自期一、与レ所三以望二於人一、盛意昭昭也如レ此、嗚呼　公抱二大志一而不レ果、中道即世、昊天何不レ恵、雖レ然、嗣君仁孝紹述在レ茲、爾衆官暨諸生往勉哉、大舜命レ契清準其推二明之一、清準拝稽首、推二明其義一曰、人之有レ道也、居然甘二飽暖一、無二教以検一レ之、飛走何撰、惟舜惻レ之、令三契為二司徒一、命レ之曰、敬敷二五教一在レ寛、此舜之所下以則二天明一而教中人倫上也、夏殷而下、方始建レ学以教レ之、是故所レ貴二乎興学一者、以俾下人各明二道義一、惇中綱常上、為レ子孝、為レ臣忠、少長慎レ序、朋友守レ信、供レ職竭レ力、仗レ義效レ死也、苟欲下外二乎此一以為上レ学、非レ道也非レ教也、非下　先公望二於人一之意上也、　先公抱二聡明之資、蘊二道義於内一、故其発二於心一也、其決レ志浩然、其処レ事沛然、是以　先公興レ学不レ見二其艱一、直与二三代一同二其帰一、　先公之所二以自期一可レ知已、於レ是又推其望二於人一、蓋曰、人不レ可レ不レ学、学則明矣、進而入二堯舜之域一、不レ学昏矣、陷而為二桀紂之流一、蓋人性之善、堯舜至二宝之一、是以韞而有レ之、徳盛而業広、日吉而以享、桀紂瓦二礫之一、是以擲而棄レ之、徳臭業堕、日凶而以廃、堯舜人之所レ希也、桀紂人之所レ賤也、徳比二桀紂一孰不レ恥也、然桀紂人也、猶是倫也、人而不レ能下拡二其道一而充中其用上、是不レ如二飛走一也、飛走蠢然一物耳、然為下其日損二生物一以自鞠上、故各循レ性趨レ事以自竭、今人日損二生物一倍二徒飛走一、而不レ思二效報一何為可乎、是以君子貴レ有レ学也、夫天既錫レ人以二至宝一矣、其為レ宝也、極大至真、霊妙莫レ測、善充レ之与二天地一参、苟不レ充与二瓦礫一、無二以異一也、瓦礫物也、頑然無情者也、其処二於世一也、不レ糜二半粟一、不レ爛二寸帛一、而有二瓦礫之用一也、今学二于此一者、道義弗レ明、網常弗レ惇、為レ子不孝、為レ臣不忠、小長之序不レ慎、朋友之信不レ守、不二供レ職而竭一レ力、不二仗レ義而效一レ死、唯食レ粟衣レ帛而已、是瓦礫之不レ若也、其責在二学子一、　先君之盛意如レ此其昭昭也、而職二乎教導一者、不レ能下遵二奉盛美一而賛中揚教化上、是使二夫昭昭者反冥冥一也、孰曰三能将二順之一、故俾下学レ于レ此者、能明二道義一、能惇二綱常一、能為レ子孝、能為レ臣忠、能慎二少長之序一、能守二朋友之信一、能供レ職而竭レ力、仗レ義效レ死、凡言之与レ行、皆能反二桀紂一而学二堯舜一、又能随二天賦一各尽二其分一、与二瓦礫飛走頑然蠢然者一大異上、而参二化育之功一有レ資者、必頼二循循善誘之勤一焉、其責在二準等一、説命曰、后克聖臣不レ命二其承一、而況盛意若レ斯昭昭乎、雖レ以二準之庸劣一、陶二鎔人材一、使三天下後世称二多士所在一、朝日済済、野日赳赳、而鳴二盛於家国一者、其任大其道遠、而不レ得レ辞、願竭二駑鈍一、弗レ斃弗レ止、然至二於其成以否一、則在二　嗣君与レ国相紹述如何一爾、非三準所二得而専一也、於是衆官諸生羅拝而退、此在二画中一而関繁之尤鉅者、故準退而特詳二書之一、実文政之二年也、

（大槻平泉「大舜命契画幅記」文政二年）

(52) 以下の文献を参考とした。註（3）大林昭雄『東東洋全傳』（ギャラリー大林出版　一九八八）、三浦三吾『近代美術の鑑賞Ⅰ東東洋』（仙北印刷センター　一九九三）。

(53) 國分豊章・森廣胖・作並清亮編『六代治家記録』（写本　宮城県図書館蔵　一八七四）。

(54) 註（34）に同じ。

(55) 註（47）に同じ。

(56) 竹内照夫『新釈漢文大系二八　礼記中』（明治書院　一九八七）。

『礼記』楽記篇には、「故に礼以て其の志を道き、楽以て其の声を和らげ、政以て其の行を一西、刑以て其の姦を防ぐ。礼楽刑政、其の極一なり。民心を同じくして治道に出る所以なり。」とある。書き下しも上記を参考とした。

(57) 「泮林」の全文は註（3）杉本氏論考に記載される。

【図版出典】

図1：「河図図」東東洋筆　一幅　紙本淡彩　文化十四年（一八一七）一五七・〇×六九・〇センチメートル　仙台市博物館（仙台市博物館編『仙台の絵師東東洋 ほのぼの絵画の世界 特別展 生誕二五〇年記念』（仙台市博物館 二〇〇五）

図2―1：「洛書図」東東洋筆　二幅　紙本淡彩　文化十四年（一八一七）各一七〇・〇×七九・〇センチメートル　山元町教育委員会（仙台市博物館編『仙台の絵師東東洋 ほのぼの絵画の世界 特別展 生誕二五〇年記念』（仙台市博物館 二〇〇五）

図2―2：（図2―1）に同じ。

図3：「真仁法親王像」東東洋筆　一幅　絹本着色　文化二年（一八〇五）　妙法院蔵

図4：「講堂全局図」（大槻平泉『養賢堂学制』 一八九二）

図5：「視学所全図」（大槻平泉『養賢堂学制』 一八九二）

図6―1：視学所のスケッチ（小倉強監修『実測図仙臺及び近郊の古建築』北匠会 一九七三）

図6―2：学室のスケッチ（同右）

図7―1：「視学所再現図・北面」（杉本欣久『研究成果報告書 東北画人基礎資料集』二〇二二）再現図は、「邦君視学所画記」の記述に基づき、「河図図」「洛書図」のほか『養賢堂学制』所収の「視学所画縮図」等を用いて、杉本氏が作成したものである。

図7―2：「視学所再現図・南面」図版出典及び再現図の作成方法については、右に同じ。

図8：「龍馬」『三才図会』王圻纂集　万暦三十七年（一六〇九）国立国会図書館デジタルコレクション

図9：「龍馬」『唐土訓蒙図彙』 平住周道著・橘守国画　享保四年（一七〇九）国立国会図書館デジタルコレクション

図10：「龍馬蒔絵筮器」（部分）一具　江戸時代　十八世紀 「龍馬蒔絵筮器」（部分）一具　江戸時代　十八世紀 （『日本近世の馬の意匠』（財団法人馬事文化財団・馬の博物館 一九九四）

図11：「神亀」『唐土訓蒙図彙』 平住周道著・橘守国画　享保四年（一七〇九）国立国会図書館デジタルコレクション

図12：「負文亀図」（部分）住吉弘貫（粢本武雄模写）一面　絹本着色　昭和四十八年（一九六七）二四四・五×二六一・〇センチメートル　京都御所紫宸殿（『皇室の至宝六　御物　障屏・調度Ⅰ』（毎日新聞社・至宝委員会事務局 一九九二））

図13：「緑毛亀」『和漢三才図会』 寺島良安尚順編　江戸時代　国立国会図書館デジタルコレクション

図14：「神亀図」 原在中筆　一幅　絹本墨画　個人蔵　江戸後期

図15：「講堂諸属配当図」（大槻平泉『養賢堂学制』 一八九二）

図16：「大舜命契図」（大槻平泉『養賢堂学制』 一八九二）

図17：「大舜命契図」東東洋筆　一幅　絹本墨画　一三二・〇×五九・八センチメートル　仙台市博物館（仙台市博物館編『仙台の絵師東東洋 ほのぼの絵画の世界 特別展 生誕二五〇年記念』（仙台市博物館 二〇〇五）

図18：「大舜命契図」東東洋筆　一幅　絹本彩色　個人蔵　（大林昭雄『東東洋全傳』（ギャラリー大林出版 一九八八））

【附記】

本稿は令和五年一月に東北大学に提出した卒業論文に加筆・修正を施したものである。執筆にあたり、長岡龍作教授および本誌査読者の先生方より、多大なるご指導、ご助言を賜った。また、作品調査、写真掲載に関して、妙法院の大道観健氏のお手を煩わせ、ご高配を賜った。末筆ながらここに記して深く御礼を申し上げます。

【査読総評】（五十音順）

・二十三年度に提出された卒業論文をブラッシュアップした内容で、現代人にとっては縁遠くなった儒教思想に基づき、仙台藩校・養賢堂の視学所に描かれた「河図図」「洛書図」の制作意図を明らかにした。日本において同様の画題はほとんど見当たらず、逆にそれが描かれたということは、よほどの理念的思想を込めた作品とみる必要がある。ただ、その背中や甲羅にあらわされた図象の解釈自体が非常に複雑であり、さらに背後にある易に基づいた陰陽五行、四象八卦などの数理思想を理解するのは困難であるため、それを説明した著書や論文をこれまでほとんど目にすることはなかった。朱子学の思想に基づき、これほどまでに計画された建造物や障壁画が存在したこと自体、驚くべき事実であり、現在まで本図が伝えられてきたことに感謝しなければならない。『易経』や「河図洛書」に関する資料に加え、本図の企画者であった大槻平泉関係の資料を精読し、障壁画にみる鑑戒性と吉祥性両面の解釈も浅薄な議論に終わらなかった点を高く評価したい。

一般的に、図像の抽象的な解釈論や影響関係論はけっきょく曖昧な堂々巡りに終始するのが関の山で、前進や進展のみられない研究状況を歯痒く思う識者も多いと推察する。本稿の方法論は、その意味においても一石を投じる内容になっているものとみる。

（東北大学大学院文学研究科　准教授　杉本欣久）

・本論考は、東東洋筆「河図図」「洛書図」をはじめとした養賢堂障壁画の制作背景や意義について新たな観点から論じたもの。先行研究でも、漠然と儒学思想とそれを負う養賢堂学頭・大槻平泉との関係で語られてはいたが、本論考では、寛政異学の禁以降正統とされた朱子学、特に格物窮理の考え方などに基づいて、養賢堂講堂の建築と障壁画が制作され、さらに実学を重視し学生を教化する点でもその場に描かれた意義があることを丁寧に論述している。制作当時の政治や学問の情勢を踏まえ、より広い視点から作品理解を深めたことは高く評価される。河図洛書や朱子学についての記述はやや難解で、内容の正否判断も難しいようにも思われるが、他分野といえる思想理解に取り組んだこと自体は評価に値しよう。

ただし、河図洛書を始め、あまり多くの絵画化の先行作例を見い出せない画題だけに、平泉から画題が与えられたとしても、図様については絵師に任された部分も大きかったのではないだろうか。絵師の関与の状況まで考察が進められれば、より深化した議論ができるだろう。

（仙台市博物館　学芸員　寺澤慎吾）

・本論は、東東洋による「河図図」と「洛書図」が仙台藩藩校の養賢堂の障壁画として飾られた意義を考察するものである。本図については、二〇二二年に発表された寺澤慎吾氏による詳細な研究ノートがあるが、本論はそれを深化されたもので、新知見が提示されている。具体的には養賢堂に関する基本的史料およびその出典となる儒教経典から、失われた養賢堂の障壁画のそれぞれの画題の意味を丁寧に解きほぐし、その制作意図として「鑑戒」と「吉祥」という重要な指摘をする。また、十八世紀後半から十九世紀前半における仙台藩の状況を分析し、障壁画が示唆する政治的教育の在り方にまで言及している。

本論文は、先行研究を踏まえながらも、本作品制作に関与した大槻平泉、仙台藩主の伊達斉宗らの在り方を朱子学の視点から具体的に提示した意欲的な研究と評価できる。また、本論は、仙台藩の障壁画という一事例を追究したものであるが、その研究手法は、近世後期に展開した儒教的な主題を持つ他の藩校の障壁画にも適応できる重要な成果を持つ。今後の著者のさらなる展開に期待したい。

（筑波大学芸術系　准教授　水野裕史）